

上峰町文化財調査報告書第12集

船石遺跡 V

平成元年度佐賀県営農業基盤整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1995年3月

上峰町教育委員会

上峰町文化財調査報告書第12集

船石遺跡 V

平成元年度佐賀県営農業基盤整備事業 に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

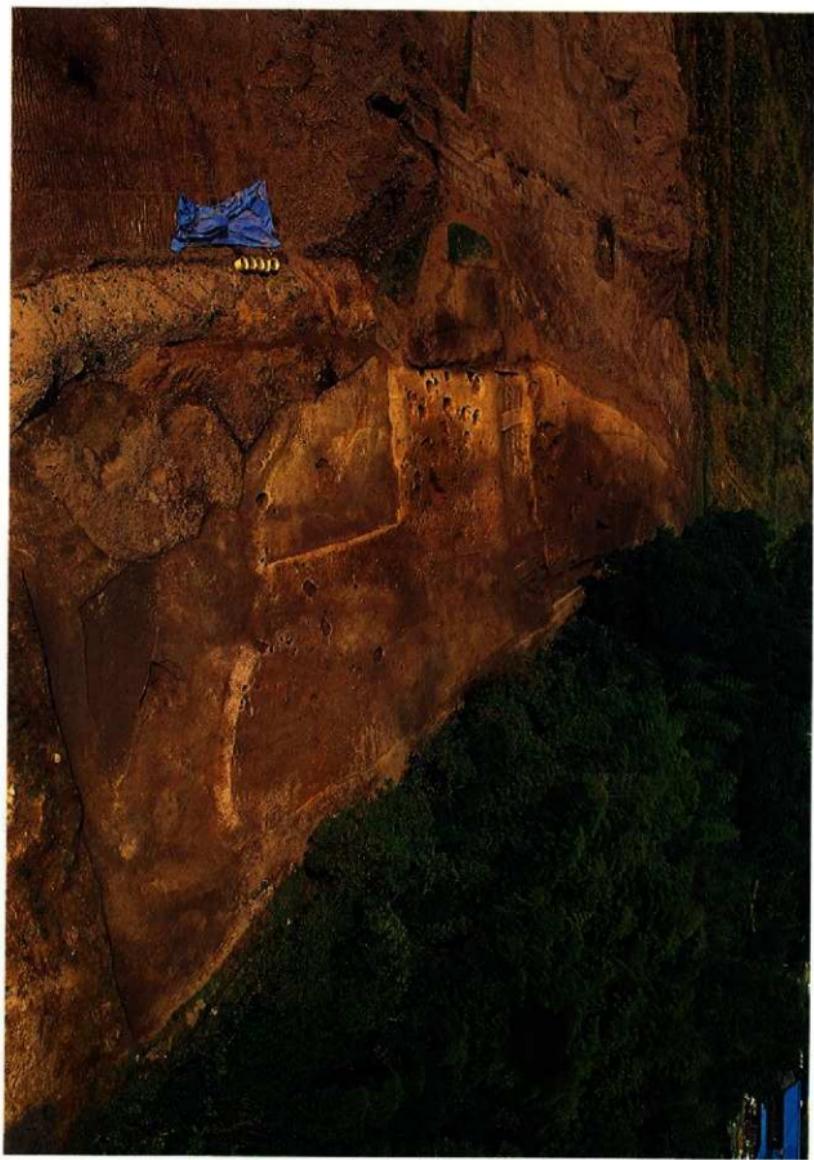


1995年3月

上峰町教育委員会



調査区域全景 一写真上方が北一



調査区域全貌 一南より一

序

従来より、上峰町は遺跡の宝庫と言わされてきました。北部の脊振山系、その南麓から派生し南北に延びる洪積世丘陵と開析谷、さらに有明海へと続く沖積平野と変化にとんだ地形を含む町域には、いたるところに先人たちの暮らしの足跡が刻み込まれています。

教育委員会では、こうした人々の暮らしの足跡、歴史的資産を保存・活用し、将来へ継承していくために、開発と文化財の保護との調整を図ってまいりました。

上峰町では町北部の大字堤地区を対象とした県営農業基盤整備事業が昭和60年度より開始され、これに伴う埋蔵文化財発掘調査を進めております。

この報告書は、平成元年度に実施した船石遺跡の埋蔵文化財発掘調査事業の報告書であります。船石遺跡は、町内有数の弥生時代を中心とした集落遺跡であります。今回の発掘調査では縄文時代の遺構遺物がまとまって検出されました。町内でも、縄文時代の遺構遺物の調査例がこの数年増加の傾向にあり、今後より古い時代の人々の生活を考える上で貴重な資料が蓄積されつつあります。

この報告書が学術資料として、また住民の共有の財産としての文化財を大切に保存していくための資料として役立てていただければ幸いです。

なお、今回の調査にあたって、ご指導、ご協力いただいた文化庁、県教育委員会文化財課、県農林部はじめ、地元関係各位に対し深く感謝申し上げます。

平成7年3月

上峰町教育委員会

教育長 野口國雄

例　　言

1. 本書は、平成元年度佐賀県営上峰北部農業基盤整備事業に伴い、上峰町教育委員会が発掘調査を実施した、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字二本谷に所在する船石遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、農業基盤整備事業により面的に削平を受ける部分1,100m²について佐賀県農林部の委託事業として上峰町教育委員会が主体となり実施したものである。調査区は11区と呼称した。
3. 現地での発掘調査は平成元年8月21日から同年10月25日まで行った。
4. 船石遺跡は、昭和63年度以前に4次の発掘調査が実施されている。調査年度、調査区名は以下のとおりである。

(1) 船石地区運動広場整備に伴う調査	昭和57年度	北区・南区（1区と仮称）
(2) 佐賀県営上峰北部農業基盤整備事業に伴う調査	昭和61年度	2～5区
(3) 佐賀県営上峰北部農業基盤整備事業に伴う調査	昭和62年度	6・7区
(4) 佐賀県営上峰北部農業基盤整備事業に伴う調査	昭和63年度	8～10区
5. 現場での遺構実測作業は、調査員の指示により実測作業員があたった。
6. 遺構及び出土遺物の写真撮影は原田大介が行った。また、空中写真撮影を有限会社空中写真企画に委託した。
7. 調査後の出土遺物、記録類の整理作業は上峰町船石文化財整理事務所及び上峰町ふるさと学館にて実施した。
8. 本文中の挿図の実測図作成、トレース作業等は調査員の指導で製図作業員があたった。
9. 本書の執筆、編集は原田が行った。
10. 今回の調査の出土遺物、図面・写真・記録類は、上峰町教育委員会で保管している。

凡　　例

1. 船石遺跡の略号は「F N I」であり、今回の調査区略号は「F N I-11」とした。
2. 遺構番号は発掘調査当時のままとした。また、遺構番号に冠した2文字のアルファベットは、遺構の種別を表わす。

S H……堅穴式住居址	S K……土壤・貯蔵穴	S J……甕棺墓	S B……掘立柱建物址
S C……石棺墓	S D……溝跡・溝状遺構	S X……性格不明・その他	
3. 挿図中の方位は、既成の地形図を用いたものは特記のないかぎり図上方が座標北、現場で作成した遺構図等は図中方位が磁北を表わしている。
4. 表中の数値に付した記号で、() は推定値を、※は部分値をそれぞれ表わす。
5. 遺構実測図中の点線は推定線を、一点鎖線は調査区境界をそれぞれ表わす。
6. 土器拓影および実測図の縮尺は、遺物番号に縮尺を記したもの以外は、全て1/3である。
7. 上峰村は、平成元年11月1日町制を施行した。村・町の表記における煩雑さを考慮し、本書では「上峰町」に統一する。

調査組織(発掘調査時)

調査事務局	総括	松田末治	上峰町教育委員会	教育長
事務主任		浜田小夜子	〃	教育課長
経費執行		吉田忠	〃	社会教育係長
〃		鶴田浩二	〃	社会教育係
〃		原田大介	〃	〃

調査組織	調査員	鶴田浩二	上峰町教育委員会	社会教育係
	〃	原田大介	〃	〃

調査指導 佐賀県教育委員会文化課

発掘作業参加者

秋山巖、秋山ユキエ、石橋テル、石丸ミチエ、大坪光代、川原正美、川原ミヨ、川原ヨシエ、北島八重子、黒石光利、高島昇、高島英子、田中巧、田中ミスエ、堤イシ、堤一、鶴田サヨ子、鶴田久子、鶴田八重子、中村初一、福島一雄、矢動丸喜三、矢動丸勤代、矢動丸ミツエ、山口ミヨ子、和佐治夫

荒木和代、島美保子、深町佐千子、馬原喜美子(以上、実測作業員)

整理作業参加者

島美保子、田尻祐子、中尾美千恵、馬原喜美子、矢動丸洋子(以上、製図作業員)

目 次

序

例言・凡例

調査組織・発掘作業参加者・整理作業参加者

I.	遺跡の位置と環境	1
1.	遺跡の位置	1
2.	歴史的環境	1
II.	調査の経過	7
1.	調査に至る経緯	7
2.	調査経過	8
III.	遺跡の概要	9
1.	遺跡の概要	9
2.	調査区域の概要	11
IV.	遺構	14
1.	堅穴式住居址	14
2.	土壙・貯蔵穴	15
3.	埋め甕	20
4.	その他の遺構	20
V.	遺物	21
1.	土器	21
2.	石器	34
VI.	まとめ	36

挿図目次

Fig. 1 上峰町北部地形概略図	2
2 船石遺跡の位置および周辺遺跡 (1/50,000)	4
3 船石遺跡周辺地形図および調査区域位置図 (1/5,000)	10
4 船石遺跡11区遺構配置図 (1/400)	12
5 竪穴式住居址実測図 S H-035 (1/80)	14
6 土壌実測図(1) S K-001～S X-021 (1/60)	17
7 土壌実測図(2) S X-024～S K-043 (1/60)	18
8 土壌実測図(3) S K-047～S K-054 (1/60)	19
9 埋め甕実測図 S X-004～S X-030 (1/20)	20
10 出土土器実測図・拓影(1) S X-004・S K-006・S K-007・S K-009・S K-011 (1/3)	26
11 出土土器実測図・拓影(2) S K-012・S K-015・S K-017・S K-023・S K-025・S X-030・ S K-031・S K-032・S K-033 (1/3)	27
12 出土土器実測図・拓影(3) S K-034・S H-035・S K-040・S D-044・S K-049・遺物包含層① (1/3)	28
13 出土土器実測図・拓影(4) 遺物包含層② (1/3)	29
14 出土土器実測図・拓影(5) 遺物包含層③ (1/3)	30
15 出土土器実測図・拓影(6) 遺物包含層④ (1/3)	31
16 出土土器実測図・拓影(7) 遺物包含層⑤ (1/3)	32
17 出土土器実測図・拓影(8) 遺物包含層⑥ (1/3)	33

表目次

Tab. 1 出土土壌一覧表	15
2 出土石器一覧表	35
報告書抄録	卷末

図版目次

巻頭図版

PL. 1 調査区域会景

2 調査区域全景

巻末図版

- 3 遺構(1) S H-035・S K-005・S K-006・S K-017・S K-007・S K-009
- 4 遺構(2) S K-010・S K-011・S K-012・S K-013・S K-014・S K-015・S K-016・S K-019・S K-020・S X-024・S K-025・S K-026・S X-027
- 5 遺構(3) S K-032・S K-033・S K-034・S K-036・S K-038・S K-042・S K-043・S K-047・S K-049・S K-050・S K-054
- 6 遺構(4)・発掘作業風景 S X-004・S X-030・C-5Gr.遺物包含層・発掘作業風景
- 7 遺物 土器(1) S X-004・S K-006 (1/4)・S K-007・S K-009・S K-011・S K-012 (1/3)
- 8 遺物 土器(2) S K-015・S K-017・S K-023・S K-025・S X-030・S X-031・S K-032・S K-033・S K-034・S H-035・S K-040・S K-044・S K-049 (1/3)
- 9 遺物 土器(3) 遺物包含層出土土器 ①・② (1/3)
- 10 遺物 土器(4) 遺物包含層出土土器 ③・④ (1/3)
- 11 遺物 土器(5) 遺物包含層出土土器 ⑤・⑥ (1/3)
- 12 遺物 石器(1) 石斧・叩き石 (1/2)
- 13 遺物 石器(2)・(3) 石鏃・石鎚・石錐・石槍 (1/1)
- 14 遺物 石器(4) 振器類 (1/1)

I. 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置 (Fig. 1)

船石遺跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字三本杉、四本杉、一本谷、二本谷の洪積世段丘上(標高14m~30m)に位置している。

船石遺跡が所在する佐賀県三養基郡上峰町は、佐賀県東部の鞍馬地帯である佐賀平野のほぼ中央、三養基郡の西端に位置しており、東部は同郡中原町・北茂安町、南部は三根町、西部は神埼郡東脊振村・三田川町と境を接している。

鳥栖市から佐賀郡大和町に至る佐賀県東部には、北部の脊振山地、その南麓に発達する洪積世丘陵、さらに南部の有明海へと続く沖積平野と変化にとんだ地形が展開している。なかでも山麓から沖積平野へと移行する部分に発達する洪積世丘陵は、山麓部に源を発し有明海へと南流する大小の河川によって開析され数多くの南北に延びる舌状を呈した段丘となっている。

船石遺跡は、町北部の大字堤地区の南東部に所在している。大字堤地区には、中央を南流する切通川の本支流の開析作用で形成された谷底平野を境界として大小の南北に延びる舌状丘陵が発達している。船石遺跡が立地する船石丘陵もそのひとつで、中原町高柳集落の標高35m付近から派生する丘陵であり、現在船石集落が位置する低位段丘上位面(坊所面、標高22~30m)とこれから南に延び、国道34号線沿いの切通集落北側で沖積平野に没する低位段丘下位面(舟石面、標高14~21m)とで構成されている¹⁾。東方の中原町上地地区の丘陵とは舟石溜池が設けられている谷底平野によって、また、西方の八幡、二塚山の両丘陵とはそれぞれ切通川の支流である大谷川、切通川本流の開析谷によってそれぞれ分かたれている。

2. 歴史的環境 (Fig. 2)

上峰町を中心に佐賀県東部の遺跡を概観すると、前述の洪積世段丘が古くから人々の生活の舞台となっており、各段丘上には遺跡の分布が知られ、県内でもとくに弥生時代遺跡を中心に遺跡の密度が高い地域となっている。沖積地をのぞむ丘陵のほとんどが集落あるいは墓域として占有され、縄文時代遺跡と比較すると、量的にも質的にも爆発的に増加、充実する。銅鐸の鋳型を出土した鳥栖市安永田遺跡²⁾、約400基の櫛棺墓が検出された中原町矩方遺跡³⁾、12本の銅矛を埋納した北茂安町検見谷遺跡⁴⁾、櫛棺墓から舶載鏡を出土した東脊振村三津永田遺跡⁵⁾、近年の工業団地建設に先立つ調査で貴重な遺構・遺物が検出された三田川・神崎・東脊振の2町1村にまたがる吉野ヶ里遺跡⁶⁾など多くの著名な集落遺跡、墳墓群が知られ、弥生の「クニ」あるいは「ムラ」単位の集団の存在が想定されるに至っている。南北約12km、東西約3kmと南北に細長い町域をもつ本町においても同様で、町の北部から中央部を占める洪積世段丘を中心に遺跡が分布している。

先土器時代の遺跡は、各段丘ごとに層序が異なる本地域においては本格的な調査がなされていないのが現状で、断片的な遺跡の採取にとどまっている。町内では、平成4年度の県営農業基盤整備事業に伴う八藤遺跡の調査において細石刃1点が検出されている⁷⁾。他には三田川町との境界に位置する二塚山丘陵の三田川町側からナイフ形石器が採取されている⁸⁾。平成5年度の八藤遺跡下層における阿蘇4火碎流と埋没林に係る調査では、先土器時代の年代示標となっている姶良一Tn火山灰(A-T)の含有ピークが、通常の丘陵上の埋蔵文化財調査で遺構検出面として

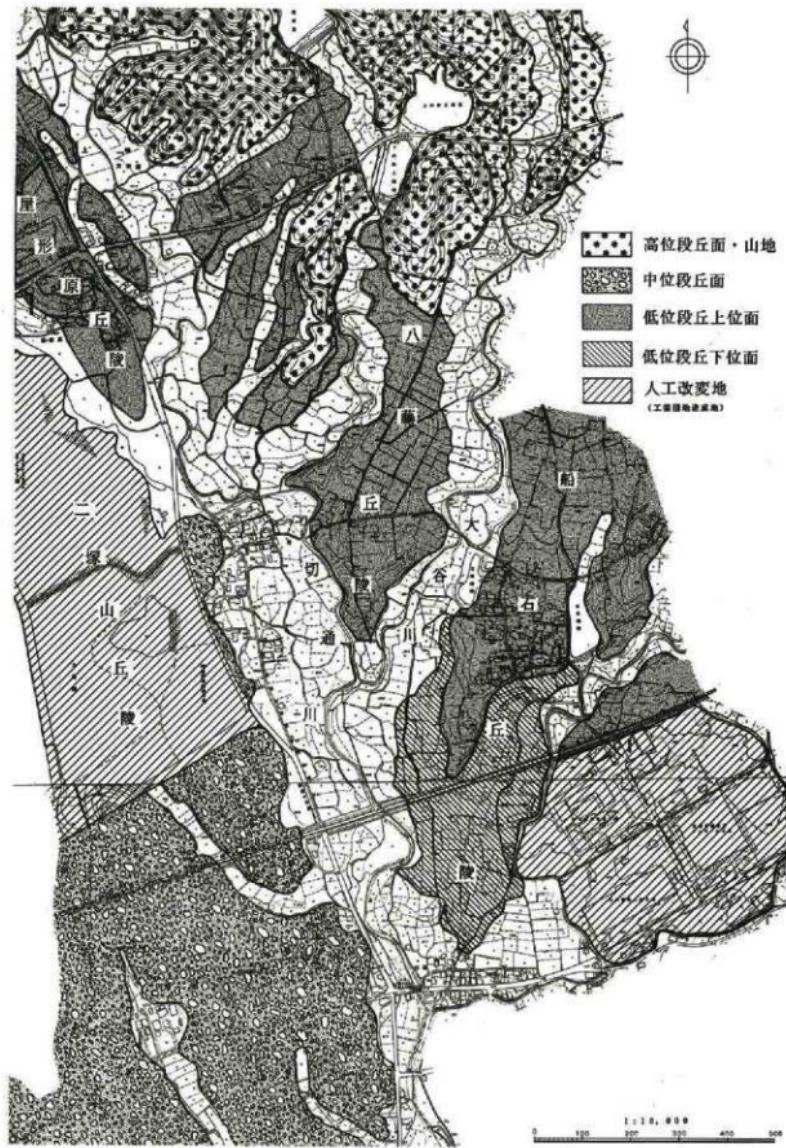


Fig. 1 上峰町北部地形概略図 (1/10,000)

いる「地山」の表層を構成する黄褐色風積土層の最上部で検出されている⁹。

繩文時代になると中原町香田遺跡¹⁰や東脊振村戦場ヶ谷遺跡¹¹などが出発する。町内においてもこれまで町北部の丘陵部から土器や石器が採取されていたが、農業基盤整備事業に伴う調査の結果、ここに報告する船石遺跡11区をはじめ八藤遺跡¹²などで遺物・遺構がまとまって検出されており、今後の調査例の増加が期待されている。

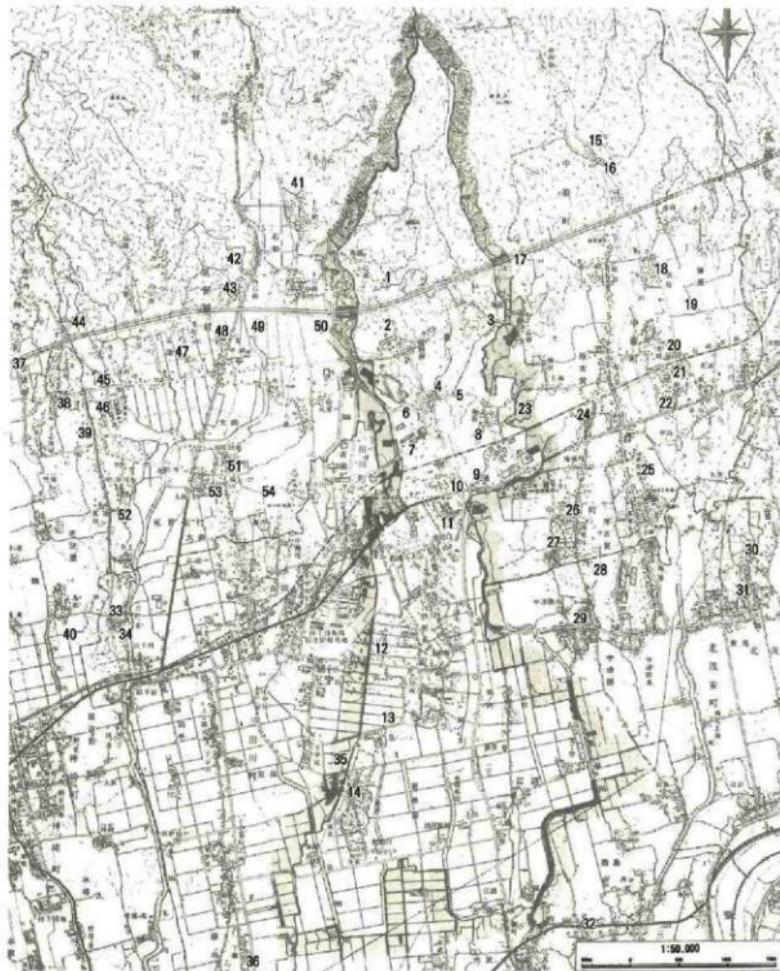
弥生時代になると、遺跡の数、規模、内容が飛躍的に増加、充実することは先に触れたが、早くから魏志倭人伝の「弥奴国」の所在地を佐賀平野東部、なかでも三養基郡西部の旧三根郡にあてる論考が行われてきたことは周知のことである。旧三根郡に属する上峰町においても、丘陵部のほとんどにこの時期の遺跡が展開している。しかし、町南地部の米多地区、坊所地区的丘陵部は、中近世以降集落として発達し早くから宅地化が進み、本格的な調査例に乏しくその内容を詳細に把握できていないのが現状である。これに対し、町北部の堤地区周辺は、近年の大型開発に伴い広範囲の遺跡が調査の対象となっており、当時の社会の様子を知るうえで貴重な資料が得られている。町内の代表的遺跡としては、豪奢墓から細形銅劍や貝釧を出土した切通遺跡¹³、神崎郡東脊振村・三田川町にまたがる佐賀県東部中核工業団地の建設に伴い豪奢墓、土壤塚約300基が調査され船載鏡、彷製鏡をはじめとする貴重な副葬品を出土した二塚山遺跡¹⁴・五本谷遺跡¹⁵、佐賀県住宅供給公社の宅地造成に伴う調査で一集団の聚落部分の全容が明らかになった一本谷遺跡¹⁶、地区運動広場整備に伴う調査で5世紀代の古墳とともに支石墓はじめ多数の豪奢墓が検出された船石遺跡¹⁷などが知られている。またこの度の県営農業基盤整備事業に伴う調査においても船石南遺跡¹⁸・船石遺跡¹⁹・八藤遺跡²⁰から住居址や豪奢墓などが検出されている。

古墳時代になると、この地域にも首長墓が出現する。初頭の時期には中尾町船原遺跡²¹・五本谷遺跡などで方形周溝墓が営まれ、やがて中期にかけて島栖市から大和町にかけての山麓部や丘陵部に前方後円墳が出現する。島栖市劍塚古墳²²、中原町姫方古墳²³、上峰町から三田川町にまたがる目達原古墳群²⁴、神崎町伊勢塚古墳²⁵、佐賀市鏡子塚古墳²⁶、大和町船塚古墳など佐賀県東部の代表的古墳が築かれる。後期になると、現在長崎自動車道や、県道鳥栖一川久保線が通る山麓部から丘陵部にまたがる一帯に小円墳を中心とした古墳が多数築かれ、それぞれが古墳群を形成している。

後の『肥前風土記』に見える三根郡米多郷に属す当時の上峰町一帯は、『古事記』の記事によれば、応神天皇の曾孫にあたる「都紀女加」なる人物が初代の米多國造として中央より下向した地域に比定され、その中心は、町南部の米多地区から三田川町の目達原一帯にあったと想定されている。町内の主要な古墳としては、米多國造一族の墳墓として、5世紀代後半に形成されたと考えられる前方後円墳7基ほか円墳数基からなる目達原古墳群、同じく5世紀代の古墳で鉢形状銅劍、鐵矛を出土した船石天神宮境内の船石古墳1～3号墳²⁷が知られている。また、後期の群集墳としては、町北部の鏡西山の周辺山麓部を中心に古墳群が存在している。一方、この時期の聚落は、三田川町下中杖遺跡²⁸、東脊振村下石動遺跡²⁹などが知られているが、弥生時代聚落の調査例に比べると少なくまだに実態が明らかになっていないのが現状である。町内の遺跡をみても、当時の政治的中心であったと考えられる町南部の米多地区周辺における本格的調査例がなく、今後の大きな課題といえる。

奈良・平安時代遺跡としては、三田川町下中杖遺跡、東脊振村辛上庵寺跡³⁰、靈仙寺跡³¹などが著名であるが、まとまった調査例が少なく実態はあまり解明されていない。当時の遺構として大規模なものは、佐賀平野にしかれた条理制の遺構が上げられ、早くから地名などから条里の復元が試みられ、現在ではほとんどの条里が復元されている。また大宰府から肥前国府へ通じる官道の調査も進み、近年部分的な発掘調査が行われている。

町内では堤土壠跡³²や塔の堺廃寺跡³³などが奈良時代の遺跡として戦前から注目されている。町北部の堤地区的八藤丘陵と二塚山丘陵の間を遮断する形で築かれた堤土壠は、版築工法により築かれた福岡県の水城に似た施



上峰町	11—一本杉道跡	21 鹿方前方後円墳	31 東尾剛削出土道跡	39 志武加隈田古墳群	49 西石動道跡
1 瓢山西南麓古墳群	12 目造原古墳群	22 鹿方原遺跡	32 三根町	40 馬郡道跡	50 下石動道跡
2 屋形原古墳群	13 塔の原勝寺塚	23 上地遺跡	33 木文貝塚	41 東脊振村	51 松原道跡
3 谷渡古墳群	14 上来多貝塚	24 フンドン落道跡	34 三田川町	42 山谷古墳	52 幸上南寺跡
4 堀土鬼跡	15 中原町	25 町南遺跡	35 吉野ヶ里丘陵道跡	43 西石動古墳群	53 大厚道跡
5 八幡遺跡	16 山田號智瀬出土土地	26 天神遺跡	36 下中林遺跡	44 戰場ヶ谷道跡	54 横田道跡
6 五本谷遺跡	17 山田古墳群	27 西寒水道跡	37 下高見塚	45 三津水田遺跡	
7 二坪山遺跡	18 大坂古墳	28 八幡古道跡	38 伊勢塚	46 下三津前方後円墳	
8 船石遺跡	19 北光安町	29 宝南谷遺跡	39 志波里六本松遺跡	47 夕ヶ里遺跡	
9 船石南遺跡	20 大坂古墳	30 宝南宮前方後円墳	40 伊勢塚前方後円墳	48 西一本杉道跡	
10 切通遺跡					

Fig. 2 船石遺跡の位置および周辺遺跡 (1/50,000)

設=「小水城」で、その築造目的が、大宰府の防衛施設であるとする説、灌漑用水確保のための堤防であるとする説など議論がなされてきたが、近年の土壘の東方に接する八藤遺跡の調査において、土壘から一直線に八藤丘陵を横断する側溝状の遺構が検出され³⁰、その性格付けにあらたに古代道の存在が想定されるに至っている。また町南西部を占める目達原丘陵の南端部に位置する塔の塚庵寺跡は、百済系卑弁軒丸瓦が発見され、戦前までは基壇、礎石の存在が知られていた奈良時代中期の寺院址で、目達原古墳群を営んだ米多国造一族の流れをくむ三根郡の郡司層が建立したものと推定されている。また町内における奈良、平安時代の集落は、農業基盤整備事業に伴う調査などで、八藤遺跡、坊所一本谷遺跡³¹などでまとまった調査がなされたのみで、今後の調査例の増加が期待される。

中世になると、北部の山麓部の小峰に山城が築かれ、沖積平野部には環濠を伴う平城や集落が出現する。町内の中世城館址としては、北部の鎮西山山城、上峰町中央部の平野を臨む丘陵部に坊所城跡、平野部には米多城跡、前牟田城跡、江迎城跡、一の橋環濠集落、茂茂環濠集落などが知られており、江迎城跡では13世紀後半代の龍泉窯系の青磁碗が、坊所城跡³²では16世紀後半代の青花がそれぞれ出土している。

以上、上峰町を中心に佐賀県東部の遺跡を概観したが、まさにこの地域は遺跡の密度、その内容ともに高く、遺跡の宝庫と部にふさわしい地域といえる。

註

- 1) 赤木祥彦 「二 地形」 「上峰村史」 上峰村 1979
- 2) 藤瀬祐博・石橋新次 「柏比遺跡群範囲確認調査第3年次概要報告書」 烏栖市文化財調査報告書第30集 烏栖市教育委員会 1980
- 3) 木下巧・天本洋一 「板方遺跡」 佐賀県文化財調査報告書第30集 佐賀県教育委員会 1974
- 4) 七田忠昭 「検見谷遺跡」 北茂安町文化財調査報告書第2集 北茂安町教育委員会 1986
- 5) 金関丈夫・坪井清足・金関恕 「佐賀県三津永田遺跡」 「日本農耕文化の生成」 日本考古学協会 1961
- 6) 桑原幸則 「環濠集落 吉野ヶ里遺跡 概報」 佐賀県教育委員会 1990
- 7) 平成4年度、上峰町教育委員会調査、整理中
- 8) 七田忠志 「原始」 「上峰村史」 上峰村 1979
- 9) 下山正一・西田民雄 「II. 佐賀県上峰町周辺の地形と地質」 「佐賀平野の阿蘇4火砕流と埋没林」 上峰町文化財調査報告書第11集 上峰町教育委員会 1994
- 10) 高瀬哲郎・堀安信・久保伸洋 「香田遺跡」 「香田遺跡」 九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(2) 佐賀県文化財調査報告書第57集 佐賀県教育委員会 1981
- 11) 七田忠志 「佐賀県戦闘ケ谷遺跡」 「史前学雑誌」 6-2・4 1934
- 12) 平成2年度、上峰町教育委員会調査、整理中
- 13) 金関丈夫・金関恕・原口正三 「佐賀県切通遺跡」 「日本農耕文化の生成」 日本考古学協会 1961
- 14) 高島忠平・七田忠昭 「二塚山遺跡」 「二塚山」 佐賀県文化財調査報告書第46集 佐賀県教育委員会 1979
- 15) 木下巧・七田忠昭 「五木谷遺跡」 「二塚山」 佐賀県文化財調査報告書第46集 佐賀県教育委員会 1979
- 16) 七田忠昭 「一本谷遺跡」 上峰村文化財調査報告書 上峰村教育委員会 1983
- 17) 七田忠昭 「船石遺跡」 上峰村文化財調査報告書 上峰村教育委員会 1983
- 18) 昭和60年度、上峰村教育委員会調査、整理中
- 19) 鶴田浩二・原田大介 「船石遺跡II 図録編」 上峰村文化財調査報告書第6集 上峰村教育委員会 1988
鶴田浩二・原田大介 「船石遺跡II 本文編」 上峰村文化財調査報告書第7集 上峰村教育委員会 1989
- 20) 平成元年度、上峰町教育委員会調査
- 21) 木下巧他 「姫方原遺跡」 佐賀県文化財調査報告書第33集 佐賀県教育委員会 1976
- 22) 石橋新次 「剣塚前方後円墳」 烏栖市文化財調査報告書第22集 烏栖市教育委員会 1984
- 23) 前出(3)
- 24) 松尾義作 「目達原古墳群調査報告 佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告」 第9編 佐賀県教育委員会 1950
- 25) 木下之治 「古代國家の形成」 『佐賀県史』 佐賀県 1968

- 26) 木下之治編 「銚子塚」 佐賀市教育委員会 1976
- 27) 前出(17)
- 28) 七田忠昭・高山久美子・西田和己 「下中村遺跡」 佐賀県文化財調査報告書第54集 佐賀県教育委員会 1980
- 29) 高瀬哲郎他 「下石動遺跡」「下石動遺跡」 九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(6) 佐賀県文化財調査報告書第86集 佐賀県教育委員会 1987
- 30) 松尾頼作 「東脊振村辛上庵寺跡の調査」 「佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告」 第5輯 佐賀県 1936
- 31) 田平徳栄他 「靈仙寺跡」 東脊振村文化財調査報告書第4集 東脊振村教育委員会 1980
- 32) 高島忠平・杠一義 「堤土屋跡」 上峰村文化財調査報告書 上峰村教育委員会 1978
- 33) 松尾頼作 「塔の環廻寺址」 「佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告」 第7輯 佐賀県 1940
- 34) 平成2、3、4年度、上峰町教育委員会調査、整理中
- 35) 平成5、6年度、上峰町教育委員会調査、整理中
- 36) 原田大介 「坊所城跡」 上峰町文化財調査報告書第10集 上峰町教育委員会 1992

II. 調査の経過

1. 調査に至る経緯

上峰町は、昭和30年代までは純農村として、近世以来の水田耕作を主とした農業經營が連續として行われてきた。しかし、戦後の激変する社会・産業の構造は、労働力の都市部への流出などを招き、旧来の農業經營による農家經濟を圧迫する事態となった。この農家經濟の行き詰まり打開のためには、近代的な大型圃場と農地の集団化を併せ行い、高度の農業生産技術と大型機械の一貫作業体系の導入により、労働生産性の向上と農業經營の合理化による農家所得の増大を図る必要があった。佐賀県では、昭和38年度より県営農業基盤整備事業の計画が策定され、昭和41年度より事業が開始された。上峰町においても、昭和42年度にモデル事業として町南部の破地区を対象に事業が実施され、昭和46年度以後国道34号線以南の町南部の圃場を対象に事業が実施された。

一方、国道34号線以北の大字堤地区の耕地は、洪積世丘陵と切通川本支流の開析谷底平野からなっており、地区的1戸当たりの平均耕地面積は約0.6haと県平均を下回り、用水源には河川、溜池があてられていたが、いずれも用水確保が不十分であり、慢性的な用水不足を来していた。また、圃場は不整形で散在し、道路は狭く未整備で機械導入も困難で圃場条件は極めて悪かった。このため、昭和58年度より、堤地区を対象とした上峰北部農業基盤整備事業の実施に向けた調査計画が開始され、昭和60年度より事業が実施されるに至った。

しかし、地形的制約の上に成り立ってきた従来の耕地の集団化、道路・用排水路の整備を目的とした農業基盤整備事業の実施は、一方では土地の大規模な改変を必要とし、ひいては地下の埋蔵文化財に工事の影響を及ぼすことが予想され、今日の要求と埋蔵文化財の保護との調整という問題が文化財保護行政の大きな課題となった。そこで、佐賀県においては、農業基盤整備事業と共に伴う埋蔵文化財の保護との調整について、県農林部と県教育委員会との間で「農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財の保護に関する確認事項」(昭和53年4月締結、昭和59年4月一部改正。)という覚書を交わし、現在この確認事項に基づき、県農林部、県教育委員会、市町村土地改良担当課、市町村教育委員会の関係機関四者により協議が行われ、調整が行われている。

上峰北部農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財の保護に関する協議調整は、昭和59年9月に、県事業担当部局から県教育委員会に昭和60年度農業基盤整備事業施工計画が提出され、JR長崎本線以南の埋蔵文化財の取扱について協議されたことに始まる。

今回の船石遺跡11区を含む船石地区一帯の埋蔵文化財の取扱についての四者協議会は、昭和60年10月15日に行われた昭和61年度農業基盤整備事業に伴う第1回の協議会が最初であった。この席上では、昭和61年度事業に伴うJR長崎本線以南の船石遺跡(2~5区として昭和61年度調査)について協議を行う一方で、次年度以降の農業基盤整備事業に先立つ船石地区一帯の埋蔵文化財確認調査について協議が行われた。その結果、昭和57年に町教育委員会が主体となって調査を実施し、支石墓、壺棺墓のほか5世紀代の古墳3基が検出され、古墳からは蛇行状鉄剣ならびに蛇行状鐵矛など貴重な遺物が出土し、県史跡に指定された船石遺跡周辺のJR長崎本線以北の水田面約40haについて確認調査を実施することになった。

確認調査は、稲刈り終了をまって実施され、2m×2mの試掘溝268カ所による調査で、県史跡が位置する低位段丘上位面の低位段丘下位面に弥生時代を中心とする遺構遺物が検出された。この調査によって、船石遺跡の範囲がほぼ把握され、全体では約100,000m²以上に及ぶことが判明した。

以後、船石遺跡については、昭和61年度から63年度にかけて、農業基盤整備事業に伴い工事の影響が地下の埋蔵文化財に及ぶ地区を対象に本調査を実施してきた。

昭和63年10月18日、「昭和64年農業基盤整備事業に係る文化財の保護に関する第1回協議会」が開催され昭和64年度（平成元年度）農業基盤整備事業として、星形原地区の事業計画が提示され、当該地区そのほかについて確認調査を実施した。その結果、星形原地区内で7,500m²の埋蔵文化財包蔵地が検出され、その取扱について協議を重ね、事業の設計変更による調査面積の縮小など文化財の保護に関する調整を進めていた。

平成元年6月、発掘調査着手直前になり、農業基盤整備事業自体の調整がとれず、星形原地区を対象とした事業は先送りされることとなった。これを受け平成元年度の事業について改めて四者協議がもたれ、急遽、代替地区としてそれまでに埋蔵文化財の確認調査を終えていた船石地区北西部から堤地区南東部一帯の耕地を対象に農業基盤整備事業が実施されることとなり、大字堤字二本谷所在の船石遺跡および字八藤所在の八藤遺跡の2遺跡について、水田基盤造成工事、水路掘削工事などで地下の埋蔵文化財に影響が及ぶ範囲を事前の記録保存を目的とした埋蔵文化財発掘調査を実施することになった。

2. 調査の経過

平成元年度の佐賀県営農業基盤整備事業に伴う船石遺跡11区の発掘調査は、水田基盤造成工事により面的に削平が予定される部分1,100m²について実施した。調査は、平成元年8月21日に着手し、同年10月25日まで現地での作業を行った。以下、簡略に調査経過を記す。

- 8月21日 調査区域全域に茂る夏場の下草および立木の伐採、焼却作業を開始し、調査に着手する。
- 24日 伐採作業を終了。午後より重機による表土剥ぎ作業を開始する。
- 29日 表土剥ぎ作業終了。同作業中に土壌歴基、ピットなどの存在が確認された。
- 30日 磁北を基準としたグリッドを設定、測量杭打ち作業を開始（9月4日まで）する。
- 9月4日 本日より作業員による作業を開始する。作業前に現場にて簡単な安全祈願を行い、発掘器材の搬入、テント設営などを行った後、午後より調査区域北側から遺構検出手作業に着手する。
- 5日 検出された遺構から逐次掘り下げを進める。
- 11日 調査区域ほぼ中央のC-5グリッドで検出された遺物包含層の掘り下げを始める。また、遺構掘り下げが終了した調査区域北側から遺構実測作業と遺構の個別写真撮影を併せて開始する。
- 9月中旬 雨天の日が多く作業進まず。
- 9月下旬～ 天候も安定し、遺構検出・掘り下げ、記録作業など調査も順調に調査区域南部へと進む。
- 10月7日～10日 町民体育大会準備などのため作業中止。
- 11日～ 遺構検出・掘り下げ、記録作業など引き続き行う。
- 17日 遺構の掘り下げ作業をほぼ終了する。気球による全体写真撮影のための清掃作業に着手。
- 19日 テント撤収。引き続き今年度の農業基盤整備事業に伴い調査が予定されている八藤遺跡の現場へ発掘器材類とともに搬出する。
- 20日 気球による全体写真撮影を行う。
- 20日～25日 遺構実測、遺構の個別写真撮影など諸記録作業を行う。
- 25日 現場でのすべての作業を終了し、現在を工事側へ引き渡す。
- この後、八藤遺跡の発掘調査を平成2年1月26日まで調査を行った。現場における調査作業が終了後の2月2日より7日まで船石文化財整理事務所にて、出土遺物の水洗作業を行った。

III. 遺跡の概要

1. 遺跡の概要 (Fig. 3)

船石遺跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字三本杉、四本杉、一本谷、二本谷の標高14m～30mの洪積世段丘上に位置している。遺跡は、これまでの調査で縄文時代から中世におよぶ各時代の遺構、遺物が検出されており、なかでも弥生時代の所産になるものが圧倒的に多く、弥生時代の集落及び墳墓がその主体の複合遺跡である。遺跡の範囲は、農業基盤整備事業に伴い過去に実施された確認調査によって、現在船石集落が立地する低位段丘上位面とこれから南に延び切通集落北部で沖積平野に没する低位段丘下位面にまたがり、100,000m²以上の範囲に及ぶことが明らかになっている。この段丘は東を切通川支流の舟石川に、西を切通川本流及び同支流大谷川に開析され、南北に長い舌状を呈している。

地元では以前から土器片や石器などが耕作に伴い採取されたり、集落の竹藪の開墾の際に甕棺が開口するなどの話が伝えられていた。また、低位段丘上位面の先端に位置する船石天神宮境内には、古墳の存在とともに「舟石」・「亀石」・「鼻血石」と呼ばれる巨石群の存在が知られ、昭和20年代より研究者のあいだでは支石墓ではないかと疑問視されてきた。この船石遺跡が、本格的に調査がなされるのは昭和57年のことで、それ以後、今回の船石遺跡II区の調査を含めて、上峰北部農業基盤整備事業に伴い4年度にわたり、11地区の調査が実施された。以下、調査年度ごとにその概要を記す。

(1) 昭和57年度 船石地区運動広場整備に伴う調査¹⁾

調査地区・調査面積・調査区域名：字四本杉の低位段丘上位面（標高21m～25m）に所在する船石天神宮境内の調査、1,660m²、北区・南区²⁾

遺構：弥生時代の竪穴式住居址9軒、支石墓2基（「舟石」・「亀石」）、甕棺墓ほか墳墓100基以上、5世紀中葉から5世紀末の古墳3基（内1基の天井石が「鼻血石」）、中世の祭祀遺構、時期・性格不明の基礎状遺構が検出された。

遺物：住居址出土の弥生式土器・石器・鐵器、甕棺墓に使用された弥生式土器、古墳出土の土師器・須恵器・鐵器、中世祭祀遺構出土の中世土器などで、なかでも古墳出土の蛇行状鉄剣・蛇行状鉄矛は被葬者の性格を表付けるものとして注目されている³⁾。

(2) 昭和61年度 佐賀県営上峰北部農業基盤整備事業に伴う調査⁴⁾

調査地区・調査面積・調査区域名：字一本谷の低位段丘下位面（標高15m付近）の水田面の調査、6,500m²、2区～5区

遺構：弥生時代から古墳時代にかけての竪穴式住居址108軒、土壤多数、掘立柱建物址3棟、甕棺墓8基、溝1条が検出された。

遺物：弥生時代住居址出土の弥生式土器・石器・鐵器、甕棺墓に使用された弥生式土器、古墳時代住居址出土の土師器・須恵器・鐵器など



Fig. 3 船石遺跡周辺地形図および調査区域位置図 (1/5,000)

(3) 昭和62年度 佐賀県営上峰北部農業基盤整備事業に伴う調査¹⁾

調査地区・調査面積・調査区域名：字四本杉の低位段丘下位面（標高19m付近）の水田面の調査、4,200m²、6・7区

遺構：縄文時代の土壙1基、弥生時代の竪穴式住居址11軒、土壙、奈良時代以降の掘立柱建物址2棟、土壙、溝3条が検出された。

遺物：縄文式土器・石斧、弥生時代住居址出土の弥生式土器・石器、奈良時代後半の土師器・須恵器、そのため船載青磁片など。とくに、奈良時代後半の土壙から出土した「肥人」のヘラ書き文字を持つ須恵器环や円面破片などは、當時この地を識字階級者が占有していたことを示唆するものとして注目される。

(4) 昭和63年度 佐賀県営上峰北部農業基盤整備事業に伴う調査²⁾

調査地区・調査面積・調査区域名：字三本杉・四本杉の低位段丘面（標高22m付近）の水田面の調査、5,200m²、8～10区

遺構：縄文時代の竪穴式住居址1軒、土壙5基、埋甕1基、弥生時代の竪穴式住居址18軒、土壙10数基、奈良時代後期の土壙1基、時期不明の掘立柱建物跡1棟、棚列と考えられる柱穴群1条等が検出された。

遺物：縄文式土器・石器、弥生時代住居址出土の弥生式土器・奈良時代後半の土師器・須恵器、そのため船載青磁片など。とくに、縄文時代後期の住居址からは、土器片とともに石棒・磨石・石皿がセットで出土している。

次に、本遺跡周辺の遺跡を概観すると、かなりの密度で弥生時代の遺跡が分布している。昭和61年度調査の船石遺跡2～3区の東南に隣接する船石南遺跡では、昭和60年度・62年度の農業基盤整備事業に伴う調査で竪穴式住居址40軒余、妻官墓をはじめ土壙墓・石棺墓など約700基が検出されている³⁾。さらに東方の船石工業団地内においても壇塚墓などの墳墓が確認されており、一带に一大墓域を形成している。これらの墳墓群を営んだ集団は、集落を主体とした船石遺跡の集団を想定することが妥当であり、船石遺跡群として有機的関連を持つものと考えられる。また、切通川西岸の二塚山丘陵上には昭和30年に調査された切通遺跡、佐賀県東部中核工業団地造成にともない調査が行われた二塚山、五本谷などの二塚山遺跡群の墓域が展開しており、これらの墳墓からは副葬品として渡式鏡・小型仿製鏡・鉄劍・鉄刀・玉類が多数出土している⁴⁾。これは副葬品がほとんど見えない船石遺跡群の墳墓群と好対照をなしている。

以上のように、本遺跡は、切通川西岸の二塚山・切通丘陵に展開する二塚山遺跡群・切通遺跡などとともに町北部の代表的な遺跡である。

2. 調査区域の概要 (Fig. 4)

今回の調査の対象となった船石遺跡11区は、平成元年度県営農業基盤整備事業施工地区の内、上峰町大字堤字二本谷の標高22m付近の低位段丘下位面に位置し、現在は水田として利用されている。調査区域は、本遺跡の北西端部にあたり、昭和63年度の調査区域（船石遺跡10区）の北部に隣接する。船石集落が立地する低位段丘上位面から、西方約100mを南流する大谷川沿いの谷底平野へ向かって緩やかに傾斜している船石丘陵の西斜面に位置し、同河川の自然堤防面と調査区域との比高差は2～4mである。

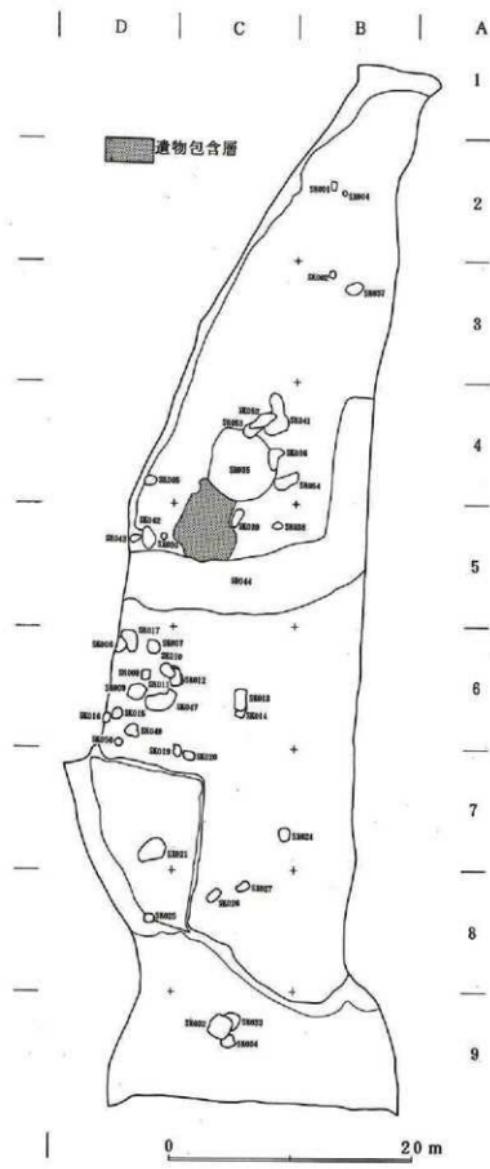


Fig. 4 船石遺跡11区遺構配置図 (1/400)

調査は、水田基盤造成工事により面的に削平される部分1,100m²について実施した。調査区域は、東西約20m、南北約90mの南北に細長い区域で、ここに磁北を基準として、南北列北から1～9、東西列東からA～Dの10m×10mグリッドを認定した。調査区域の土層は、後世の水田耕作のため、一部C-5Gr付近の凹地に遺存する遺物包含層を除いて沖積世の自然堆積層が失われ、耕作土直下は洪積世段丘を構成するいわゆる地山であり、この面が遺構検出面となっている。

遺構は、調査区域のほぼ中央部に集中して検出された。竪穴式住居址S H-035がC-4Gr.で検出され、その南部のC-5Gr.では、地山の凹地に遺物包含層が遺存している。土壤は、C-6・D-6Gr.付近に集中して検出された。さらに近世以降の幅約2.5mの用排水路が調査区中央を東から西へ継続している。

調査の結果、今回検出された遺構・遺物は縄文時代中期から後期を主体としたものであり、これまで本遺跡の各年度ごとの調査において主体的に検出されてきた弥生時代所産の遺構・遺物は皆無であった。

註

- 1) 七田忠昭 「船石遺跡」 上峰村文化財調査報告書 上峰村教育委員会 1983
- 2) 農業基盤整備事業に係る船石遺跡の調査にあたって、この「北区」・「南区」を「船石遺跡1区」と仮称した。
- 3) 調査区域は「船石遺跡」として、また古墳出土遺物も「船石遺跡1・2・3号墳出土遺物」としてそれぞれ昭和59年3月21日に佐賀県史跡および重要文化財の指定を受けている。
- 4) 鶴田浩二・原田大介 「船石遺跡II 図録編」 上峰村文化財調査報告書第6集 上峰村教育委員会 1988
鶴田浩二・原田大介 「船石遺跡II 本文編」 上峰村文化財調査報告書第7集 上峰村教育委員会 1989
- 5) 原田大介 「2. 船石遺跡」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書7』 佐賀県文化財調査報告書第94集 佐賀県教育委員会 1989
- 6) 原田大介 「6. 船石遺跡8・9・10区」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書8』 佐賀県文化財調査報告書第98集 佐賀県教育委員会 1990
- 7) 原田大介 「3. 船石南遺跡」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書7』 佐賀県文化財調査報告書第94集 佐賀県教育委員会 1989
- 8) 金闇丈夫・金闇恵・原口正三 「佐賀県切通遺跡」 「日本農耕文化の生成」 日本考古学協会 1961
高島忠平・七田忠昭他 「二塚山」 佐賀県文化財調査報告書第46集 佐賀県教育委員会

IV. 遺構

本遺跡は、過去の調査に於いて縄文時代から中世にわたる遺構・遺物が検出され、弥生時代を中心とする複合遺跡であることが知られている。今回の調査において検出された遺構は、近世以降の用排水路と考えられるSD-044を除けば、すべて縄文時代の遺構であった。今回の調査区域の南に隣接する10区（昭和63年度調査）では調査区域の北部から縄文時代の遺構・遺物が検出され、弥生時代のそれは調査区域の南部に限られていたが、今回11区の調査で弥生時代の遺構・遺物が検出されなかつたことによって、改めて船石丘陵西斜面の弥生時代集落の北限を確認できたといえる。

今回の現場における調査の時点で遺構として発掘作業を行ったものは、竪穴式住居址1軒・貯蔵穴などの土壌・埋め甕その他52基・溝跡1条の合計54遺構とその他のピット、それにC-5Gr.を中心に検出された遺物包含層がある。それらのなかで土壌などとして調査した52基の遺構の中で、いわゆる「倒木痕」と呼ばれる落ち込み、あるいは発掘の結果明らかに木の根、最近の掘り込みと判断できたものについては割愛し、ここでは、竪穴式住居址1軒・土壌など38基・埋め甕2基・溝跡1条・遺物包含層について報告したい（なお、割愛したものについてはTab.1の末尾に調査時の遺構番号を列記したので参照されたい）。

1. 竪穴式住居址 (Fig. 5・PL. 3-1)

今回の調査で検出された竪穴式住居址と考えられる遺構は、C-4Gr.で検出されたSH-035のみである。長径6.17m、短径5.56mの不整な円形のプランを呈し、浅い擂鉢状に掘りくぼめられている。床面と考えられる部分が踏みしめられたように締まっており、他の遺構表面である地山面とはやや異質な地面の様相を呈しているので遺構と判断した。掘り方は、深いところでも25cm程度で、周囲に壁状の立ち上がりは認められず、本来の形態を残しているのか、あるいは壁が後世の削平によって失われややくぼんだ床面だけが遺存したものかは不明である。

柱穴と考えられるピットは、床面の硬化部分を取り巻くように3ヵ所5本が検出されておりいずれも深さ15cm~20cmで浅い。間隔から推測すると南にも柱があったものと思われる4本柱の可能性が高い。いずれにせよこれらの柱穴は柱を建てるためのものではなく、柱を単に固定する程の機能しかなかったものと考えられる。

出土遺物は、滑石を多量に混入した阿高式土器が出土している。

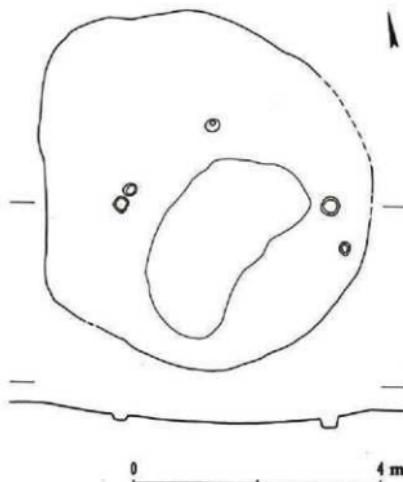


Fig. 5 竪穴式住居址実測図 SH-035 (1/80)

2. 土壙・貯蔵穴 (Fig. 6~7 • PL. 3~5 • Tab. 1)

今回の調査で検出された土壙は、38基であった。これらは平面形態と深さにより、SK-001、SK-005、SK-013、SK-014、SK-026、SK-032など方形を基調としたプランで深さが比較的浅いものと、SK-007、SK-009、SK-015、SX-024、SK-025、SK-050など円形を基調としたプランで深さが比較的深いものとに分類できる。さらに、この二者のほか、SX-021、SK-042、SK-047、SK-052など不整形のプランを呈し掘り方も不規則なもの一群が認められる。今回の調査では、袋状土壙や、土壙の床面中央にピットをもつ「落とし穴」の土壙は検出されなかった。

検出された各土壙の規模・深さ等の法量、及び出土遺物は下記一覧表にまとめた。

Tab. 1 出土土壙一覧表

遺構 番号	平面 形態	規模 (上段…上面、下段…底面、単位: m × m ²)				柱穴状の ピットなど	石器などの 出土遺物	備考
		長さ・長径	幅・短径	深さ	底面積			
SK-001	不整方形	0.75	0.38	0.20	0.2			
		0.64	0.32					
SK-002	椭円形	0.68	0.56	0.04	0.3			
		0.62	0.48					
SK-005	椭丸長方形	1.01	0.78	0.31	0.5	3脚に小穴		
		0.90	0.58					
SK-006	不整円形	1.27	※0.84	0.83	※0.3			
		0.67	0.59					
SK-007	不整方形	1.10	1.07	0.49	0.4			
		0.73	0.65					
SK-008	不整方形	※0.75	0.70	0.08	※0.3			
		※0.67	0.64					
SK-009	不整円形	1.50	1.32	0.89	0.2			
		0.60	0.40					
SK-010	不整形	2.27	0.97	0.44	0.7			
		1.98	1.29					
SK-011	不整形	1.57	0.90	0.54	(0.8)			
		1.36	0.75					
SK-012	不整形	1.60	1.04	0.09	(1.2)			
		1.52	0.90					
SK-013	椭丸長方形	1.78	0.95	0.15	1.5			
		1.74	0.89					
SK-014	椭丸長方形	1.07	0.69	0.05	(0.6)			
		0.98	0.62					
SK-015	円形	0.95	0.87	0.56	0.3			
		0.62	0.60					
SK-016	不整円形	0.85	※0.52	0.68	※0.1		石鏟	
		0.50	※0.26					
SK-017	不整形	1.80	※1.60	0.16	(1.3)			
		1.57	※0.95					
SK-019	不整円形	1.05	0.88	0.24	0.4			
		0.65	0.71					
SK-020	不整円形	1.22	0.96	0.28	0.3			
		1.05	0.55					

遺構番号	平面形態	規模(上段…上面、下段…底面、単位:m・m ²)				柱穴状のピットなど	石器などの出土遺物	備考
		長さ・長径	幅・短径	深さ	底面積			
S X-021	不整形	2.41 1.45	1.75 0.65	0.43	0.7			
S X-024	不整円形	1.22 0.96	0.86 0.64	0.67	0.5			
S K-025	不整円形	0.84 0.67	0.76 0.66	0.43	0.4			
S K-026	不整方形	1.28 1.17	0.71 0.58	0.17	0.7			
S X-027	不整形	1.09 0.32	0.78 0.31	0.29	0.1			
S K-032	不整方形	1.83 1.70	1.82 1.74	0.40	2.2			
S K-033	不整円形	※1.43 0.62	※1.40 0.48	0.53	1.4		石錐・磨製石斧 ・搔器	
S K-034	不整形	(1.1) (1.7)	0.56 0.48	0.30	0.3		搔器	
S K-036	不整形	1.77 1.25	1.69 0.70	0.10	1.1			
S K-037	不整円形	1.52 1.44	1.00 0.90	0.40	1.0			
S K-038	不整形	1.08 0.93	0.73 0.51	0.06	0.4			
S K-039	不整形	1.67 0.62	0.76 0.48	0.15	0.6			
S K-041	不整形	3.30 3.21	2.00 1.83	0.08	3.9			
S K-042	不整形	1.85 1.72	1.12 0.86	0.55	1.1			
S K-043	不整形	0.89 0.84	0.65 0.58	0.39	0.4			
S K-047	不整形	2.73 2.55	1.11 1.00	0.54	2.2		石錐	
S K-049	不整形	1.07 0.68	0.80 0.61	1.00	0.3			
S K-050	円形	0.75 0.33	0.69 0.36	0.51	0.1			
S K-052	不整形	2.45 1.50	0.90 0.37	0.29	0.5			
S K-053	不整形	※1.91 ※1.83	1.07 0.69	0.10	※0.5			
S K-054	不整形	2.19 1.90	0.98 0.67	0.23	0.9			

割愛遺構番号
 樹根跡・後世の掘り込み S K-003・S K-028・S K-029・S K-031・S K-040・S K-051
 水田底土の認認 S X-018
 倒木痕 S X-022・S X-023・S K-045・S K-046

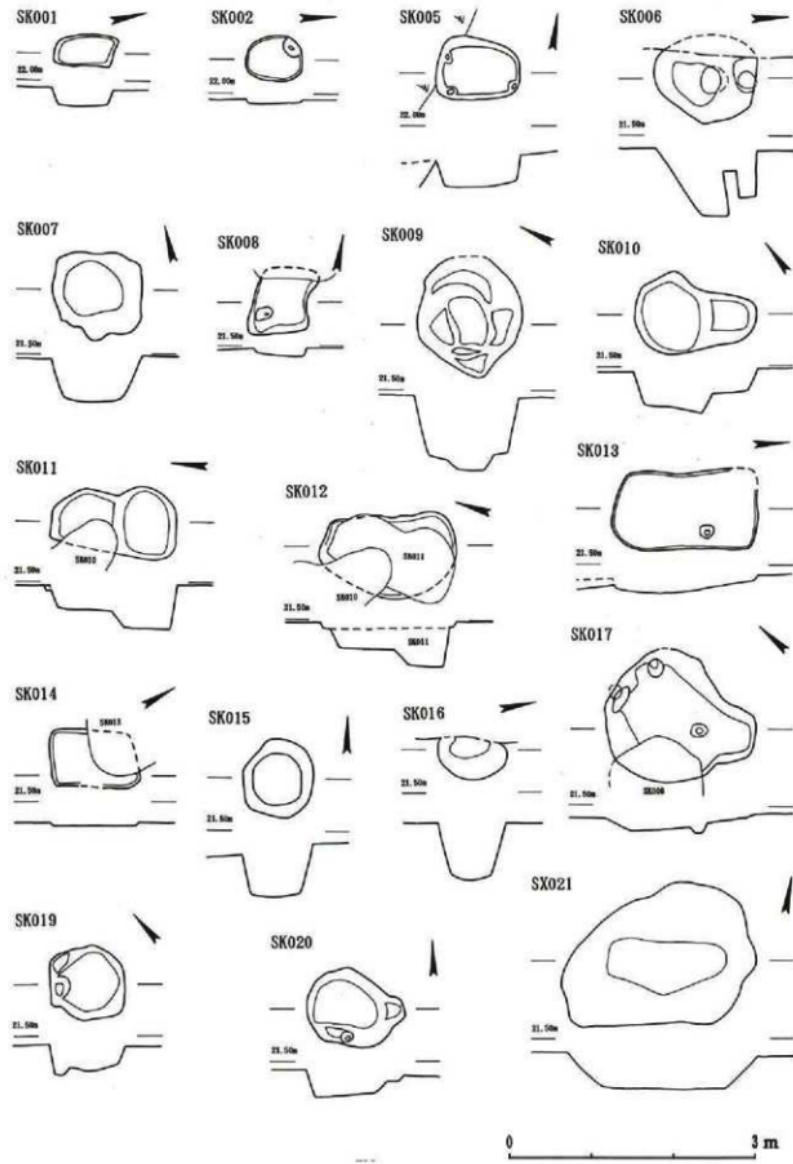


Fig. 6 土壤実測図(1) S K-001～S X-021 (1/60)

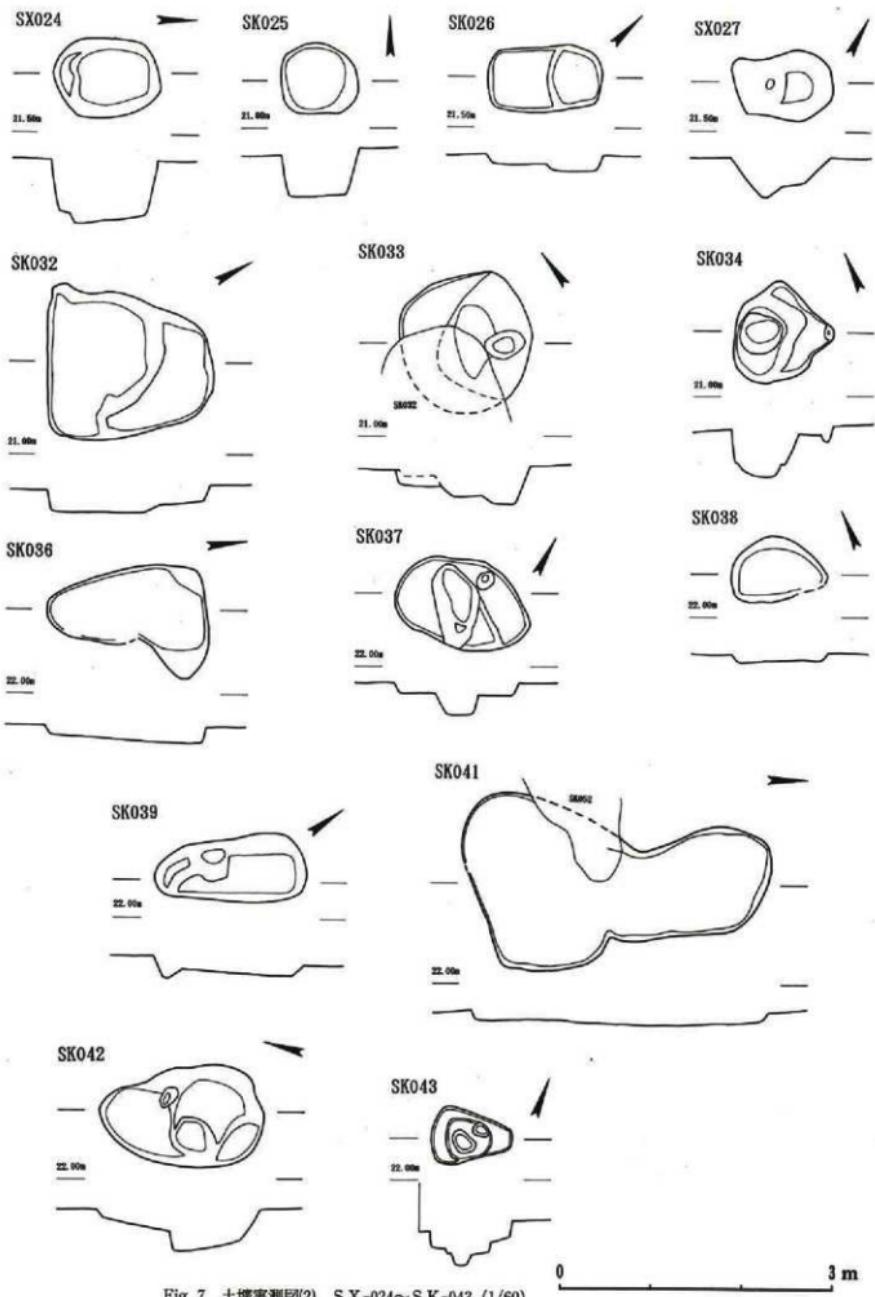


Fig. 7 土壤剖面図(2) SX-024~SK-043 (1/60)

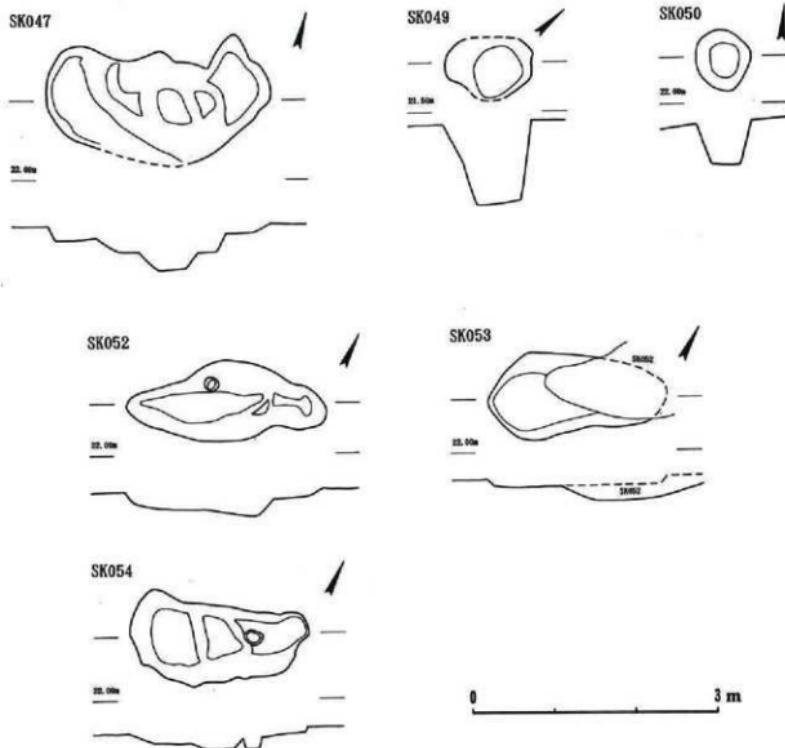


Fig. 8 土壌実測図(3) SK-047～SK-054 (1/60)

3. 埋め甕 (Fig. 9・PL. 7)

今回の調査で、円形の掘り方に土器を埋置した遺構が2基検出されている。いずれも上部が後世の耕作により失われている。埋め甕は、住居址内の施設あるいは屋外の単独施設としての例が知られているが、ここでは後者と考えたい。また、埋め甕の性格については、埋葬施設・貯蔵施設などと論議されているが、今回出土した2基についてはその用途を示すような共伴遺物は出土していない。

S X-004は、直径約55cm、深さ約30cmで底部を埋置する部分がさらに一段埋められた二段掘りの円形の掘り方に晩期の粗製の深鉢の胸部と別固体の底部が正置されている(Fig. 10-1, 2)。一方、S X-030は、直径約55cm、深さ約25cmの掘り方に底部を伴わない粗製の深鉢の胸部が正置されている。この土器は、S X-004の土器と同じく晩期の粗製の深鉢であるが、遺存状態が極めて悪く復元・図示ができなかった。

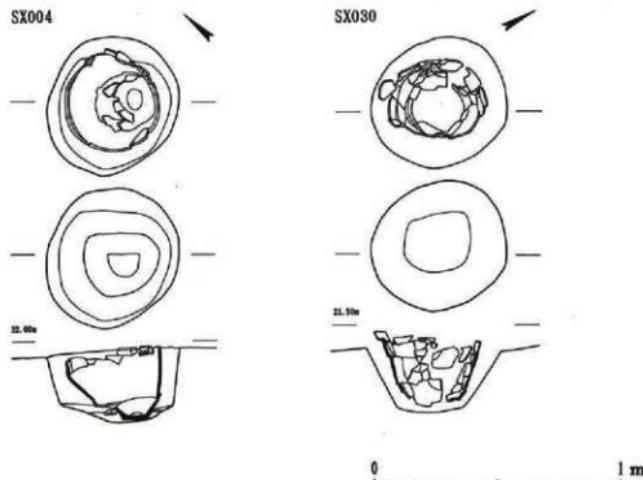


Fig. 9 埋め甕実測図 S X-004・S X-030 (1/20)

4. その他の遺構 (Fig. 4・PL. 6)

今回の調査ではこれまでに報告した遺構の他に、C-5Gr.を中心とした区域に暗茶褐色土からなる遺物包含層が遺存していた。この部分では、上面から土器片が多数検出されたが(PL. 6-24, 25)、この包含層を掘り込んだ遺構は平面的に確認できなかったので逐次剖層の全体的な掘り下げを行った。その結果、数個の土壤状の落ち込みからなる凹凸の激しい地山面が検出された。これらの落ち込みのなかには人工的な掘り方を想起させるものもあるが、遺物の出土状況と落ち込みが必ずしも一致しない。よってここでは一括して単に包含層として報告する。

この他、S D-044として調査した溝は、近世以降の陶磁器片を含んでおり、水田の用排水路の跡と判明した。この溝跡からも縄文式土器や石器が出土している。

V. 遺 物

今回の調査で検出され、ここに報告する遺物はすべて縄文時代の土器や石器であり、弥生時代その他の時代の遺物は出土していない。ここでは、土器の代表的なものを遺構ごとに、石器類は機種ごとに報告する。

なお、実測図の土器拓影、断面および土器写真図版の縮尺は、「1/4」の特記のないものはすべて1/3であり、また、実測図に付した遺物番号は、写真図版に付した遺物番号に一致する。

1. 土器 (Fig. 10~17 • PL. 7~11)

S X-004出土土器 (Fig. 10 • PL. 7-1, 2)

1は、2とともにS X-004に埋置されていた晩期の粗製の深鉢で、口縁部と底部を失った状態で出土した。胸部が上位で「く」の字型に屈曲し、上部は内傾外反しながら口縁部にいたる。灰褐色を呈し、内外面共に粗いナデ。胸部外面にはスグが付着しており、本来は煮炊きに使用されていたものと考えられる。

2も、晩期の粗製の深鉢の底部で、胸部以上を失っている。明黄褐色を呈し、内外面共に粗いナデ。底面に原体不明の圧痕を残す。

S K-006出土土器 (Fig. 10 • PL. 7-3)

3は、磨消繩文をもつ後期の深鉢の口縁部。口縁部が肥厚し、頸部でくびれ肩部が大きく張る。口縁は4ヶ所で小さく波うつ波状口縁で高まりの部分にさらに粘土を貼り付けて装飾としている。文様は棒状工具の先端を使用したと思われる列点文が口縁部の装飾下部に、頸部から肩部にかけて同じ原体を使用したと考えられる沈線文が配され、2条の沈線の間に繩文を残す。内面はナデ。外面明黄褐色、内面灰褐色を呈す。

S K-007出土土器 (Fig. 10 • PL. 7-4~7)

4~6は、鉢。4、6は口縁が外反するもので、いずれも茶褐色を呈し、それぞれ口縁部にヘラ状工具による直線文、波状文が連続して施されている。内面はナデ。

5は口縁が直立し、口縁下に2条の凹線がめぐる。内面には横位の条痕を残すもので、胎土に滑石を含んでいる。外面暗茶褐色、内面明赤褐色を呈す。7は、肩部が張りながら内湾する口縁をもつ小型の深鉢で口唇部にヘラ状工具により刻み目が施されている。外面ナデ、内面に細かい条痕文をもつ。外面暗黄褐色、内面黒褐色を呈す。

S K-009出土土器 (Fig. 10 • PL. 7-8~10)

8は、磨消繩文をもつもので、内面は条痕を施した後ナデ。茶褐色を呈し、磨消繩文以下が赤色塗彩されている。

9は内傾する口縁をもつもので、明赤褐色を呈し、胎土に滑石を含む。10は、外面に粗い条痕がほどこされた深鉢の胸部で、茶褐色を呈し内面はナデ。

S K-011出土土器 (Fig. 10 • PL. 7-11~15)

11は、磨消繩文をもつもので茶褐色を呈し、内外面共に条痕を施した後粗くナデられている。

12~15は、いずれも胎土に滑石を含み、凹線文をもつもので赤褐色を呈し、内面はナデ。14, 15は、同一個体と

みられるが直接接合はできなかった。

S K-012出土土器 (Fig. 11・PL. 7-16~19)

16~19は、いずれも胎土に滑石を含み、赤褐色（16, 17）あるいは黄褐色（18, 19）を呈す。

16は、棒状工具による凹線文をもつ。

17は、口縁下に爪先の押圧による3段の爪形文が施され、口唇部は指頭で連続的に押圧することにより細かな波状口縁を作りだしている。

18, 19は、把手の破片で、18は把手下部に刺突文が施されている。

S K-015出土土器 (Fig. 11・PL. 8-20)

20は、断面逆「L」字形の口縁部で上面に2本の沈線がめぐる。黄褐色を呈す。

S K-017出土土器 (Fig. 11・PL. 8-21)

21は、口縁下に指頭の連続押圧による列点文が施されている。茶褐色を呈す。

S K-023出土土器 (Fig. 11・PL. 8-22)

22は、胎土に滑石を含み、口縁外面には爪先による斜線文が、押圧文が施されている。暗赤褐色を呈し、内面ナデ。

S K-025出土土器 (Fig. 11・PL. 8-23)

23は、口縁下に爪先により2段の爪形文が施されている。茶褐色を呈す。

S K-030出土土器 (Fig. 11・PL. 8-24~26)

24は、口縁下部に爪先による凹線文をもつ。外面黒褐色、内面黄褐色を呈す。

25は、壺の口縁、頸部と考えられる破片で口縁部外面に2条、内面に1条、頸部と肩部の境界に1条の細い沈線がめぐる。暗黄褐色を呈し、内外面共に丁寧なナデ。

26は、沈線文をもつ小片。

S K-031出土土器 (Fig. 11・PL. 8-27, 28)

27は、やや外反する口縁で、凸帯が1条めぐり凸帯には棒状工具の先端による押圧文が施されている。外面は黒褐色、内面は暗茶褐色を呈し、胎土に砂粒のほか角閃石の結晶を多量に含んでいる。

S K-032出土土器 (Fig. 11・PL. 8-29~46)

29, 30は、深鉢の底部で、30は底部外周に連続した指頭の圧痕が施されている。

31は、口縁部外面に棒状工具による2段の短い斜線文がめぐる。

32は、口縁がやや外反しながら開く深鉢で、口縁上部に粘土を貼り付けることで口縁部を部分的に高め、その上面と外面に指頭による短い沈線を施し装飾としている。灰褐色を呈す。

33は、大きく開く浅鉢の口縁部で、口唇部に棒状工具による刻み目が施されている。胎土は滑石を含み、赤褐色を呈す。

34は、壺の肩部で、頸部との境界にヘラ状工具による刻み目が施された1条の断面三角形の小さな凸帯がめぐる。外面は黄褐色、内面は暗茶褐色を呈し、外内ナデ、内面には指頭による調整痕をのこす。

35は、49（SK-034出土）と同一個体と考えられるが直接接合はできない。おそらくSK-032がSK-034を切っており、本来はSK-034に属するものと考えられる。

36は、やや外反しながら開く深鉢の口縁部で、爪先による斜線文がめぐる。外面茶褐色、内面黄褐色を呈し、内面ナデ。

37は、口縁が「く」の字形に開く深鉢の口縁部で、外面暗茶褐色、内面明黄褐色を呈す。外面は粗い条痕を施した後ナデ、内面ナデ。

38は、晩期の浅鉢で、口縁部は外反しさらに口唇部が小さくつまみ出されている。灰褐色を呈し、内外面共にナデ。

39は、口縁が外反しながら広がる深鉢で、口縁下に爪先の押圧による爪形文がめぐる。外面黄褐色、内面暗灰褐色を呈し、内面ナデ。

40は、口縁部がやや肥厚し開く深鉢で、内外面共に灰褐色を呈し、ナデ。

41は、深鉢の頸部で断続的な爪先による凹線文がめぐる。明茶褐色を呈し、内面ナデ。

42は、壺の肩部で内外面共に明赤褐色を呈し、丁寧なナデ。

43は、山形口縁の深鉢で、棒状工具の先端による刺突文と沈線の装飾をもつ。内外面共に暗茶褐色を呈し、ナデ。

44は、深鉢の胴部と思われるもので、外面赤褐色、内面灰褐色、内外面共に粗い条痕が施されている。

45は、深鉢の口縁下部の装飾部分の破片で粘土帯を貼り付けさらに沈線による装飾がほどこされている。胎土に滑石を含み、赤褐色を呈す。

46は、深鉢の山形口縁部分で、外面には継の沈線、口唇部にも沈線が走る。黄褐色を呈し、内外面共にナデ。

SK-033出土土器 (Fig. 11・PL. 8-47, 48)

47は、深鉢の口縁部で、外面は条痕が施された後ナデ、内面ナデ。内外面共に茶褐色を呈す。

48は、深鉢の口縁下部で、爪先による斜めと横位の凹線文が施されている。胎土は滑石を含み、暗赤褐色を呈す。内面ナデ。

SK-034出土土器 (Fig. 12・PL. 8-49)

49は、やや開きながら直立する深鉢で、口縁部が肥厚し外面に継横の沈線が施されている。内外面共に明赤褐色を呈し、胎土に角閃石を少量含む。内外面共に粗い条痕がのこる。

SH-035出土土器 (Fig. 12・PL. 8-50~58)

50, 51は、平底を呈す深鉢の底部で、50は胎土に滑石を含む。

52, 57は、同一個体で、深鉢の口縁部である。口縁上面に蛇行させた粘土を貼り付けることにより装飾としている。口縁外面には棒状工具の先端による4段の横位の沈線文が断続的にめぐる。外面茶褐色、内面黄褐色を呈す。

53は、深鉢の口縁部で、52と同様に口縁外面に棒状工具の先端による3段の横位の沈線文が断続的にめぐる。外

面茶褐色、内面赤褐色を呈し、内面ナデ。

54～56、58は、いずれも胎土に滑石を含む深鉢の口縁で、54、56、58は指頭または爪先による連続押圧文が施され、55は2条の指頭による凹線文がめぐる。54は黄褐色、他は、赤褐色を呈す。

S K-040出土土器 (Fig. 12・PL. 8—59～63)

59は、直立する口縁をもつ深鉢で、胎土に滑石を含む。1条の指頭による凹線文がめぐる。外面暗赤褐色、内面暗茶褐色を呈し、内面ナデ。

60は、肥厚する口縁端部へラ状工具による刻み目を持つもの。

61は、口縁が内湾しながら開く深鉢で、口縁外面には棒状工具の先端による2段の斜線文が巡り、口唇部には条面から豊穣工具の先端で連続押圧することによって細かい波状口縁を作りだしている。内外面共に茶褐色を呈し、ナデ。

62は、胎土に滑石を含む深鉢の胸部で、棒状工具の先端による沈線文が施文されている。赤褐色を呈し、内外面共にナデ。

63は、胎土に滑石を含む深鉢の口縁部付近の破片で、指頭による浅い斜め、横位の沈線文が施文されている。暗赤褐色を呈し、内外面共にナデ。

S D-044出土土器 (Fig. 12・PL. 8—64～68)

64は、内傾する口縁部が外反しながら肥厚するもので外面には棒状工具の先端による斜線文が見える。胎土に滑石を含み、赤褐色を呈す。

65は、内湾しながら開く口縁の深鉢で、口縁部外面には、方向を異にした2段の棒状工具の先端による斜線文を配することによる羽状文の沈線文が施文されている。また、口縁内面に粘土帯を貼り付けることによって二重の口唇を作りだしている。茶褐色を呈し、内面ナデ。

66は、深鉢の胸部破片で、内外面共に沈線文により施文されている。黄褐色を呈す。

68は、浅鉢の底部で、暗灰茶褐色を呈し、内外面共に丁寧なナデ。

S K-049出土土器 (Fig. 12・PL. 8—69～75)

69は、やや上げ底の深鉢の底部。

71は、深鉢の口縁部で無文。暗茶褐色を呈し、内外面共にナデ。

72は、口縁部が肥厚する深鉢で、口縁外面には沈線文が施文されている。黄灰褐色を呈す。また、図示した破片の右辺には焼成前の穿孔が施文されている。

73は、器形が特異な土器である。丸ぞこの底部は算盤珠のような稜をもち上部へと統く。暗茶褐色を呈し、外側はナデ。内面は粗いナデ。

75は、断面逆「L」字型口縁の小型の鉢で、茶褐色を呈す。外面は直接火を受けたものか黒変している。

遺物包含層出土土器 (Fig. 12～17・PL. 9～11—76～213)

C-5Gr.を中心には遺物包含層が遺存しており、多数の土器片が出土した。なかでも中期の土器がもっとも多い。以下、特徴的なものについて報告する。

前期の土器

187は、細い粘土紐を貼り付けたミミズバレ状の凸帯と刺突文をもつもので、轟B式である。

後期・晩期の土器

後期の土器としては、85, 96, 142, 175, 177, 183, 193, 196, 202, 208, 209などの磨消繩文を持つものや99, 199, 202などの磨研土器が出土している。晩期の土器としては、194の刻み目凸帯文土器がみえる。

このほか後晩期の土器としては、164, 169の粗製の深鉢などがある。

中期の土器

前述のように、この時期の土器片がもっとも多く検出されており、なかでも76～84, 86, 87, 92～95, 98, 100, 101, 105～138, 140, 144～162, 167～174, 175, 176, 179, 184, 188, 189, 203～206など阿高式土器の系統に含まれるものが中心である。Fig. 14, 17に掲げたものなどは胎土に滑石を含んでいる。文様は、指頭、爪先等による凹線文、沈線文あるいは指頭などの連続押圧文などが施されている。

特徴ある土器

88, 92は、遺存部外面が赤色塗彩されている。136, 137, 198は補修孔と思われる焼成後の穿孔をもつ。166, 206は、環状の把手がつくもの。206は胎土に滑石を含む。104, 207は、円盤状の底部に短い口縁が立ち上がるも、皿あるいは蓋と考えられるものである。104は、全体の約1/3程が遺存しているが、内外面にヘラ描きの幾何学文が施文されている。207は、無文で胎土を滑石を含む。

お詫び

現地での調査から整理作業にいたる間に、S K-005出土深鉢1個体(PL.3-2 参照)が、調査員のミスによって所在不明となり、今回報告できなかった。今後所在が判明し次第補遺したい。当事者の不手際により関係各位にご迷惑をおかけすることをお詫びいたします。

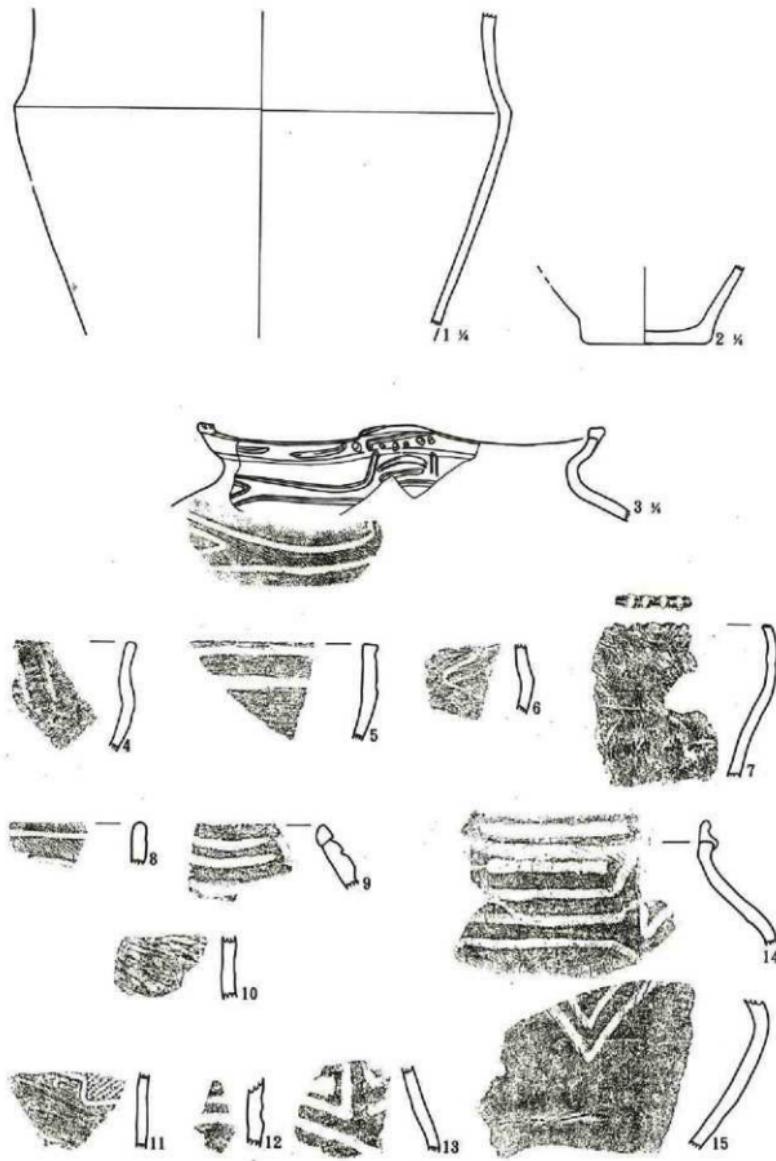


Fig. 10 出土土器実測図・拓影(1)
S X-004(1, 2)・SK-006(3)・SK-007(4~7)・SK-009(8~10)・SK-011(11~15)

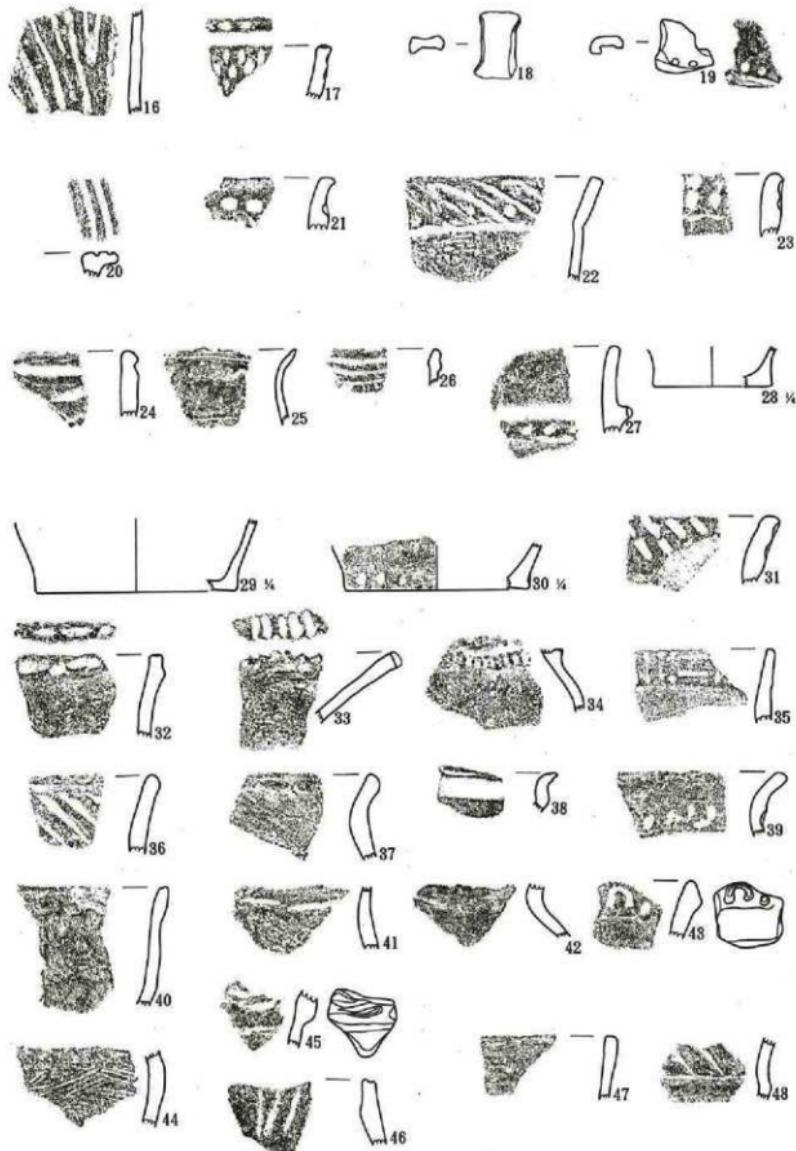


Fig. 11 出土土器实测图・拓影(2)

S X-012(16~19)・S K-015(20)・S K-017(21)・S K-023(22)・S K-025(23)・S X-030(24~26)・
S K-031(27, 28)・S K-032(29~46)・S K-033(47, 48)

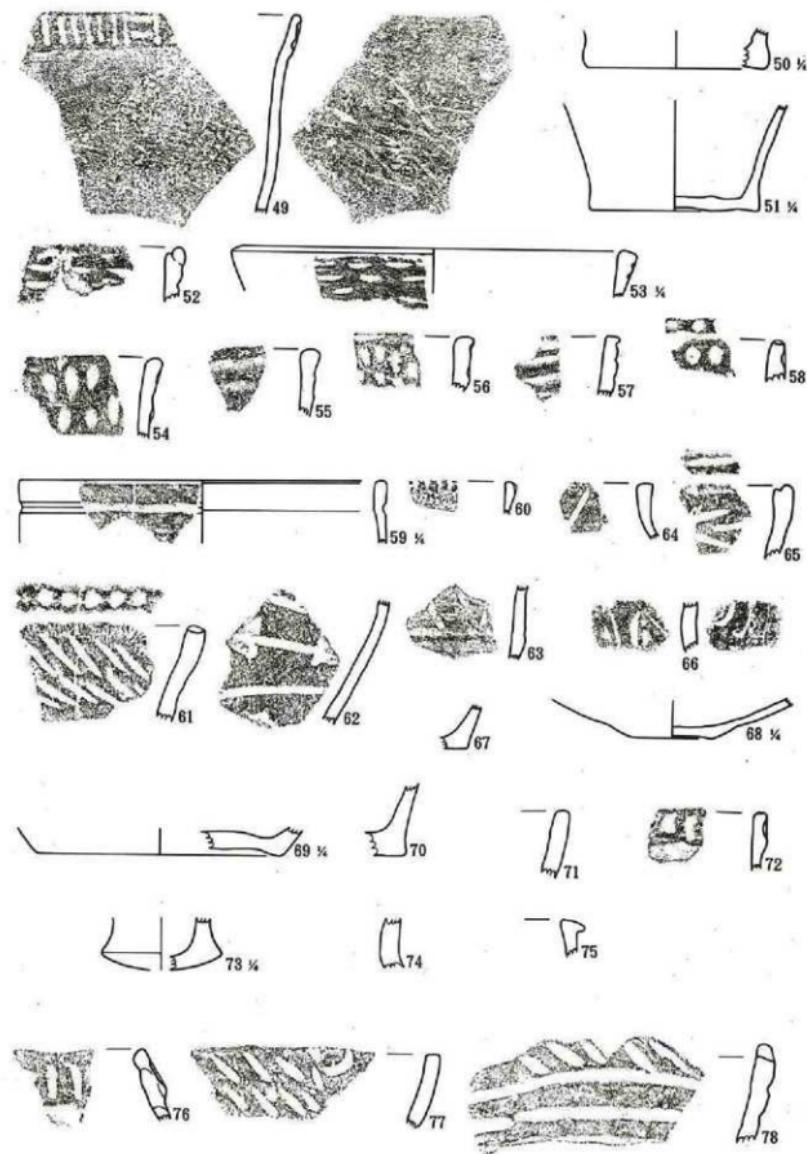


Fig. 12 出土土器実測図・拓影(3)

S K-034(49)・S H-035(50~58)・S K-040(59~63)・S D-044(64~68)・S K-049(69~75)・
遺物包含層出土①(76~78)

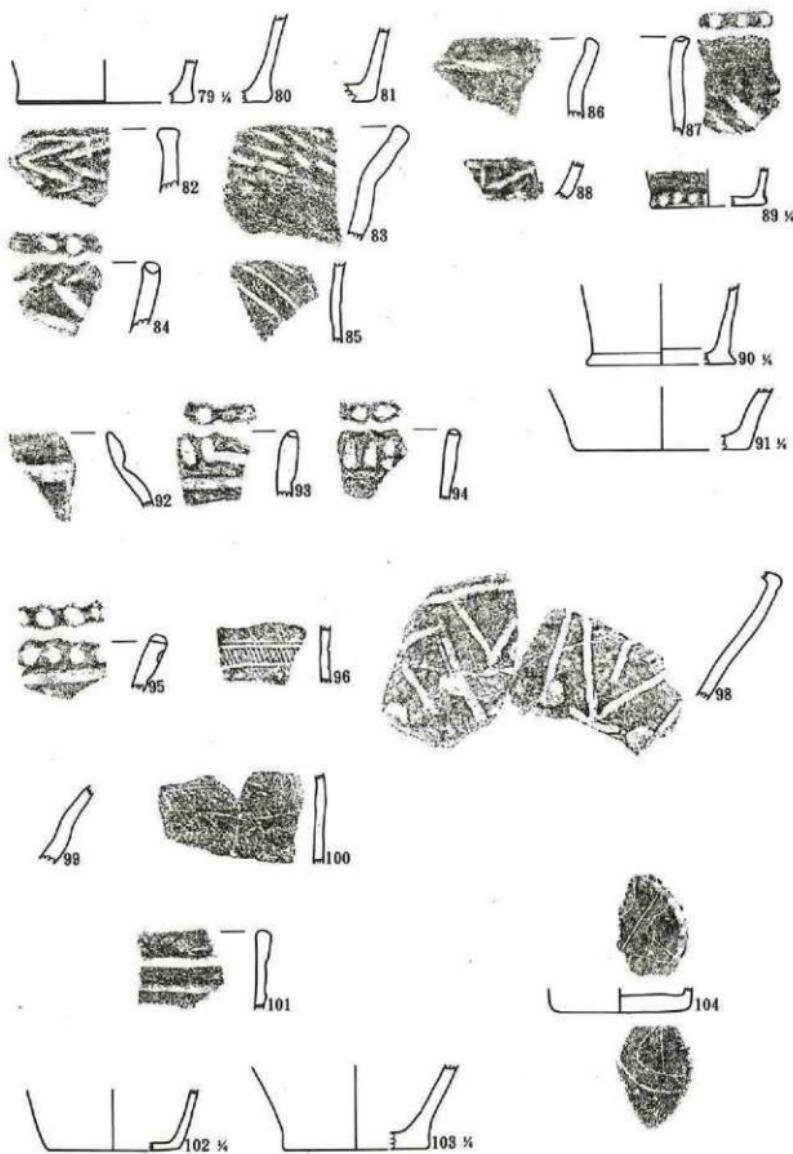


Fig. 13 出土土器実測図・拓影(4) 遺物包含層出土②(79~104)

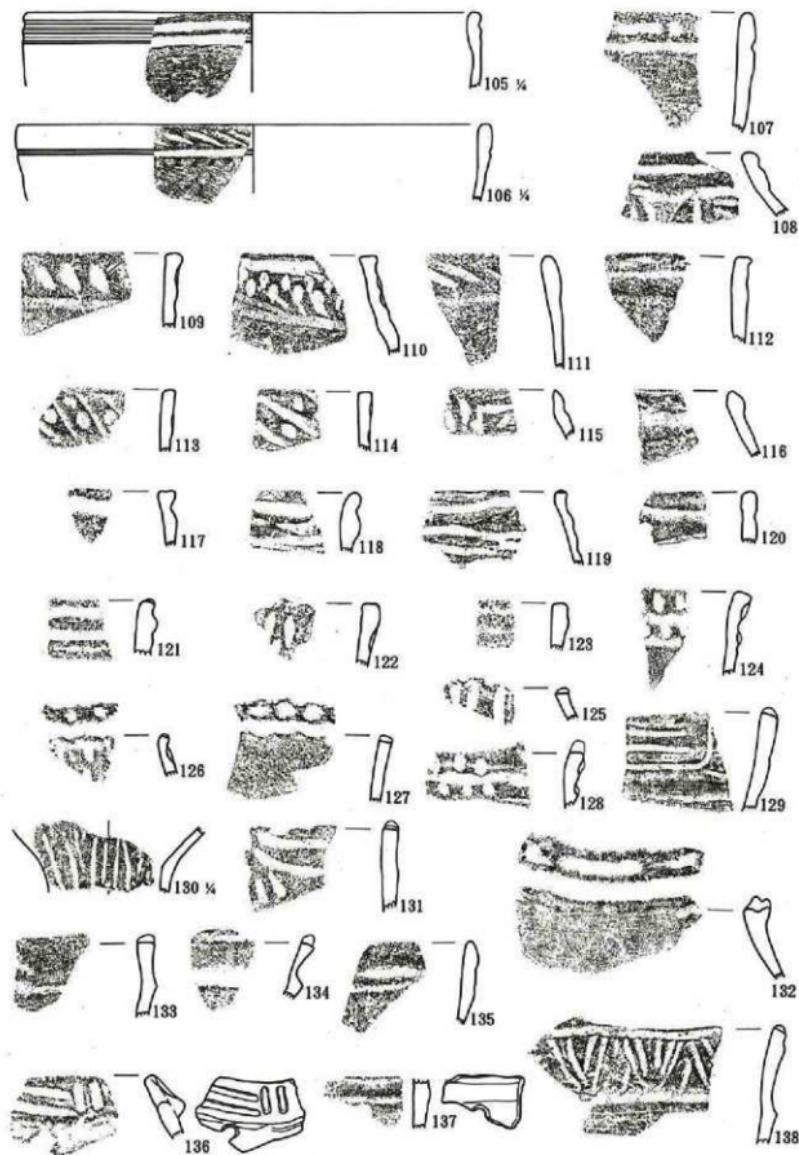


Fig. 14 出土土器実測図・拓影(5) 遺物包含層出土③(105~138)

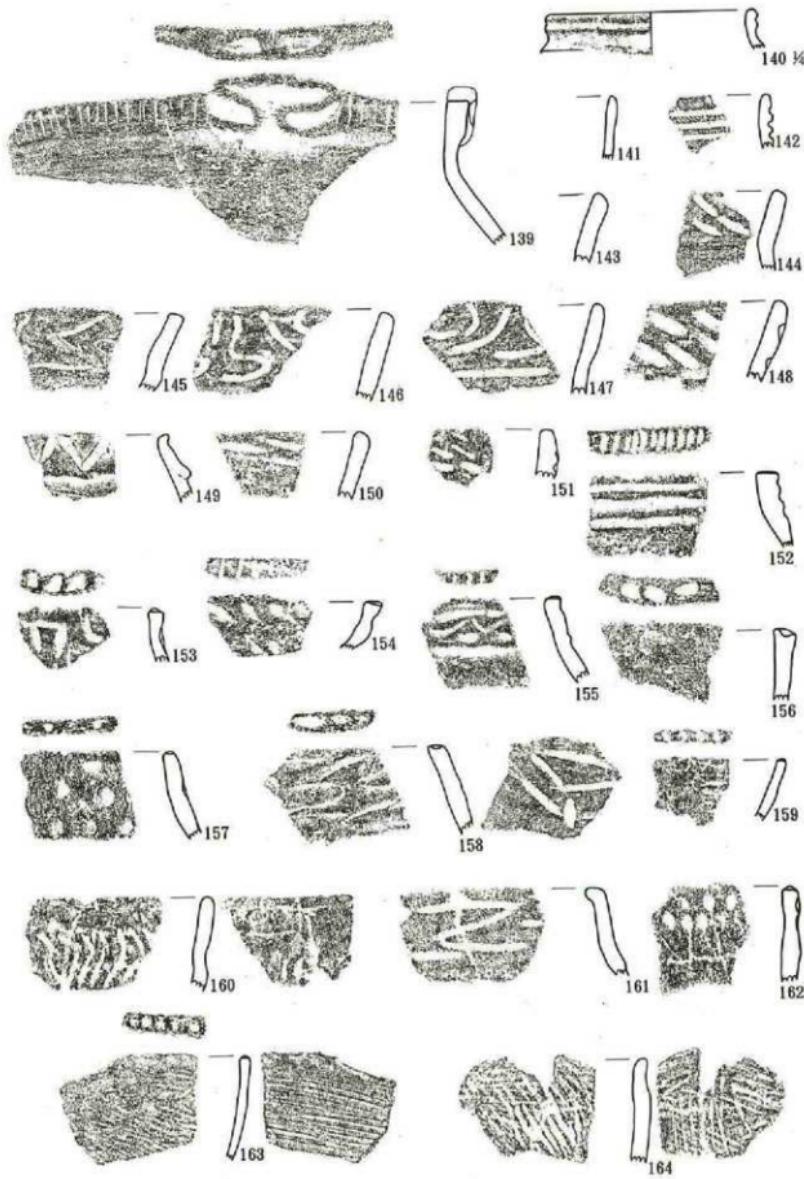


Fig. 15 出土土器実測図・拓影(6) 遺物包含層出土④(139~164)



Fig. 16 出土土器実測図・拓影(7) 遺物包含層出土⑤(165~202)

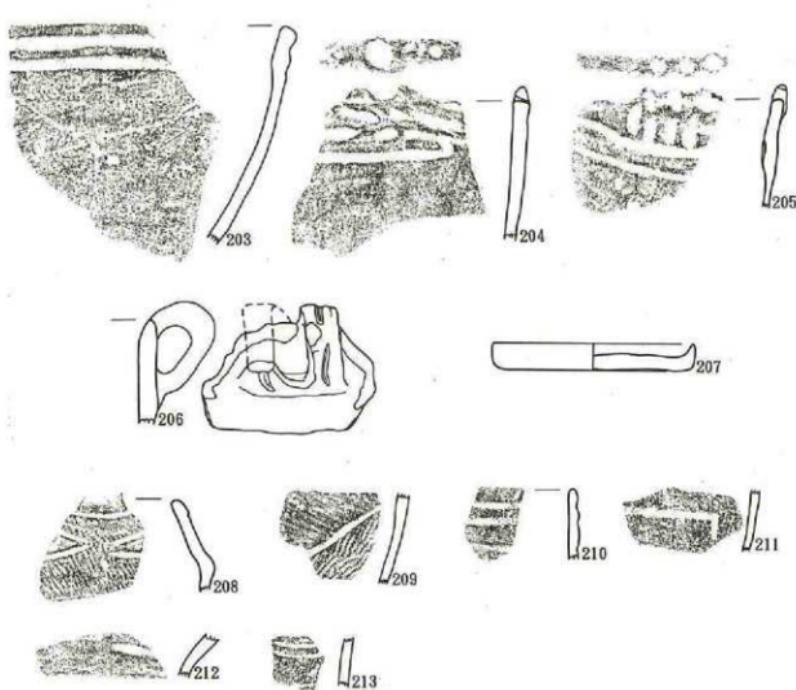


Fig. 17 出土土器実測図・拓影(8) 遺物包含層出土⑥(203~213)

2. 石器 (PL. 12~14)

今回の調査ではここに報告する石器のほかにも剝片やチップなどが出土しているが、ここでは典型的な石器22点について報告する。

磨製石斧 (PL. 12-1~5)

磨製石斧は5点出土している。1, 2は断面が梢円形を呈す乳棒状の両刃の石斧で刃部と上面が磨かれている。1は基部、側辺に成形時の調整痕を残しており、刃部が欠損している。2は完形。3, 4は小型の短冊形の両刃石斧で、3は断面がやや偏平な梢円形を呈し、基部、側辺に成形時の調整痕を残す。4は偏平な断面を呈し、写真右辺を残し全面が磨かれている。1, 3, 4は蛇紋岩製、2, 5は泥岩製。

叩き石 (PL. 12-6, 7)

叩き石は2点出土している。いずれも、上面觀はほぼ円形を呈すが、6は梢円形、7は偏平な断面を呈す。6は風化が進んだ花崗岩製、7は凝灰岩製。

石鎌 (PL. 13-8~16)

石鎌は9点出土している。8~10は、縦長の二等辺三角形を呈す凹基式の石鎌で、側辺は鋸歯状に細かい刃が作りだされている。12~14縦長の石鎌で基部の抉りが弓状を呈すもの。12は側辺がやや湾曲している。13は基部の側辺はやや湾曲し、先端を細く作りだしている。14は側辺が直線的なもの。15は基部の抉りがほとんどなく、二等辺三角形を呈す。16は正三角形に近い凹基式の石鎌。使用されている石材は、黒曜石製の11をのぞき、他はすべてサヌカイト製である。

石鋸 (PL. 13-8~17)

サヌカイトの縦の剝片の下辺に調整を加え鋸歯状の細かい刃を作りだしてある。他の部分は無調整で表裏には主剝離面を残している。

石錐 (PL. 13-18)

断面が方形を呈す厚い剝片の一端を尖らせ、さらに調整を加え鋭い先端部を作っている。また、基部にも調整を加え弧状の抉りを入れている。サヌカイト製。

石槍 (PL. 13-19)

縦長の剝片を利用し、両辺から大まかな剝離を行い成形し、さらに調整を加え刃部としている。先端部が失われている。サヌカイト製。

撫器 (PL. 13-19~22)

20は、断面が偏平な三角形を呈す縦の剝片の湾曲した側辺（写真右辺）に調整を加え刃部としている。サヌカイト製。21は、主剝離面を残す薄い縦の剝片の側辺下部の湾曲した部分（写真右辺下）に調整を加え刃部としている。

打面の全面と裏面の一部に自然面が残る。細長く延びる部分の先端が失われている。サヌカイト製。22は、黒曜石の断面が偏平な三角形を呈す小さい縦の剝片（写真上方が打点、裏面は主剥離面）を使用したもので、側刃（写真左辺）の一部に調整を加え弧状に抉りその部分を刃部としている。また、基部両側に抉りを入れ石匙のつまみに似た突起を作りだしている。

Tab. 2 出土石器一覧表

(数値は全て遺存部の値)

遺物No	種類	出土遺構	法量 (単位: cm・g)				石材	備考
			長さ	幅	厚さ	重量		
1	磨製石斧	SK-033	17.3	7.0	5.0	680	蛇紋岩	
2	〃	包含層	17.5	7.3	4.6	830	泥岩	
3	〃	SK-033	9.7	5.0	2.4	140	蛇紋岩	
4	〃	〃	9.5	5.1	1.8	120	〃	
5	〃	包含層	11.0	4.6	2.5	120	泥岩	
6	叩き石	〃	11.1	10.3	6.5	1,130	花崗岩	
7	〃	〃	12.2	11.0	2.9	430	凝灰岩	
8	石鍬	表土層	2.6	1.6	0.2	1.2	サヌカイト	
9	〃	包含層	2.7	1.6	0.2	0.7	〃	
10	〃	〃	3.0	1.8	0.3	1.2	〃	
11	〃	〃	1.9	1.3	0.35	0.6	黒曜石	
12	〃	SD-044	3.9	2.1	0.45	3.1	サヌカイト	
13	〃	SK-047	3.1	1.9	0.45	2.5	〃	
14	〃	〃	3.8	2.1	0.6	3.4	〃	
15	〃	包含層	2.0	1.5	0.35	0.7	〃	
16	〃	〃	2.0	1.5	0.4	0.7	〃	
17	石鋸	SK-016	6.2	4.4	0.7	22.4	〃	
18	石鍬	SK-033	4.6	2.5	1.3	14.1	〃	
19	石槍	SK-048	7.4	2.9	1.35	31.0	〃	
20	搔器	SK-033	5.6	2.4	1.0	9.6	〃	
21	〃	SK-034	6.2	3.3	0.8	11.3	〃	
22	〃	包含層	3.1	1.5	0.5	2.0	黒曜石	

VI. まとめ

これまで上峰町およびその周辺の地域では、東脊振村戦場ヶ父遺跡、中原町香田遺跡などいくつかの遺跡が調査されているが、弥生時代以降の遺跡の調査例に比べるとごく僅かで、断片的な資料の蓄積がなされている状況である。町内においても同様で、これまで有識者の現地調査による遺物の採取例や耕作に伴う遺物の出土例は知られていたが、遺跡の内容は全く不明の状態であった。

このようななか、上峰北部農業基盤整備事業に伴う船石遺跡の発掘調査における縄文時代遺構・遺物の出土は、今回の調査を含めて3回目となった。昭和62年度の調査では、後期の土壙1基が検出され、土器片とともに石斧が出土した。63年度の調査では、後期の竪穴式住居址1軒ほか土壙が検出され、住居址からは、石棒、石皿、磨石が土器片とともにセットで出土しており、町内における資料も増加する傾向にある。さらに今回の調査では、中期を主体とする遺構・遺物が検出され、この地域の縄文時代の社会を考える上で貴重な資料をえることができたと言える。以下、簡単に遺構・遺物についての所見を列記しまとめとしたい。

遺構について

今回の調査で検出された縄文時代の遺構は、SH-035竪穴式住居址1軒、土壙38基、埋め甕2基などである。

住居址は、出土遺物から縄文中期のものと考えられる。地面を浅く掘り窪みだけの住居の形態が佐賀平野の縄文中期の普遍的な住居形態であるのか、あるいは拠点的な集落が他所に存在し、この住居がキャンプサイト的な使われ方をしたものか、現時点では不明である。しかし、主柱穴と思われるビットの深さからしても恒久的な住居というより、ある期間に野営的な使い方がなされたものと考えられる。

埋め甕は2基検出されたが、いずれも晩期の所産になるものである。この時期の土器を埋置した遺構としては、支石墓の内部主体としての土器棺または土器単独の土器棺墓が知られているが、これらは後の弥生時代の巣箱墓と同様に土器を上下2個組あるいは単独で水平ないし、やや傾斜をもたせ埋置するのが通例である。今回検出された埋め甕は、いずれも底部を打ち欠いた深鉢を正位置で埋置しており、このような墳墓とは性格を異にするものと考えたい。

遺物について

今回の調査では、縄文式土器とそれらに伴う石器類が出土している。

縄文式土器は、中期の阿高式土器の特色をもつものが大多数を占めている。しかし、標式遺跡である熊本県阿高貝塚出土の土器と比較すると地城性なのか、文様の構成などやや萎縮、退化したような印象を受ける。

船石遺跡の弥生時代遺構の北限について

昭和63年度の9・10区における調査では、弥生時代の遺構は調査区域の南半部でのみ検出された。今回の調査において弥生時代の遺構が検出されなかったことによって、改めて船石丘陵の西斜面の弥生時代集落の北限が確認できたと言える。

以上、今回検出された遺構・遺物について簡単に所見を述べたが、縄文時代の遺構・遺物については他に調査例が少なく現時点では判断できない問題が多い。今後の調査例の増加を待ちたい。

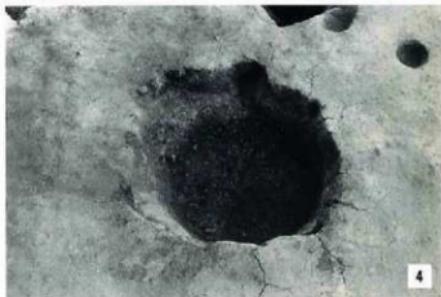
図 版



1



2



4



3



5

1 SH-035 一東より一

4 SK-007 一北より一

2 SK-005 一北より一

5 SK-009 一南東より一

3 SK-006右下・SK-017上 一西より一



6



7



8



9



10



11



12



13

6 SK-010・SK-011・SK-012 一東より一

7 SK-013左・SK-014右 一西より一

8 SK-015中・SK-016左上 一東より一

9 SK-019右・SH-020左 一北より一

10 SK-024 一東より一

11 SK-025 一北東より一

12 SK-026 一南東より一

13 SK-027 一南東より一



14



18



15



19



16



20



17

14 SK-032中・SK-033左・SK-034右 一北西より—
15 SK-036 一東より—
16 SK-038下 一北より—
17 SK-042左・SK-043 一北より—

18 SK-047 一南より—
19 SK-049 一北より—
20 SK-050 一西より—
21 SK-054 一北東より—

21



22



23



24



25



26



27

22 SX-004 一北西より一

23 SX-030 一北西より一

24 C-5Gr. 遺物包含層上面 一北より一

25 C-5Gr. 遺物包含層上面 一西より一

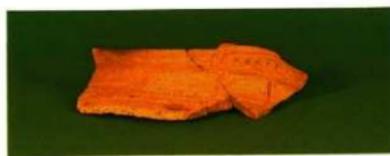
26 同包含層充掘状態 一南より一

27 発掘作業風景



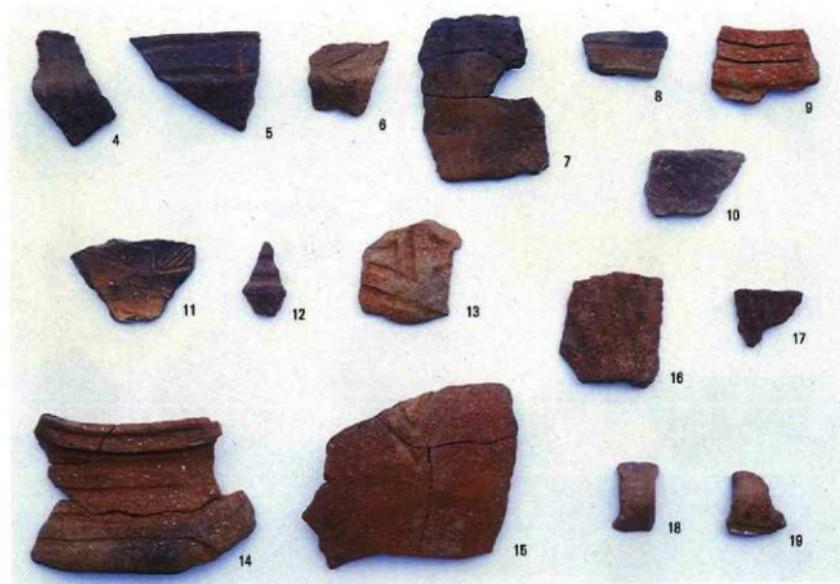
1

2



3

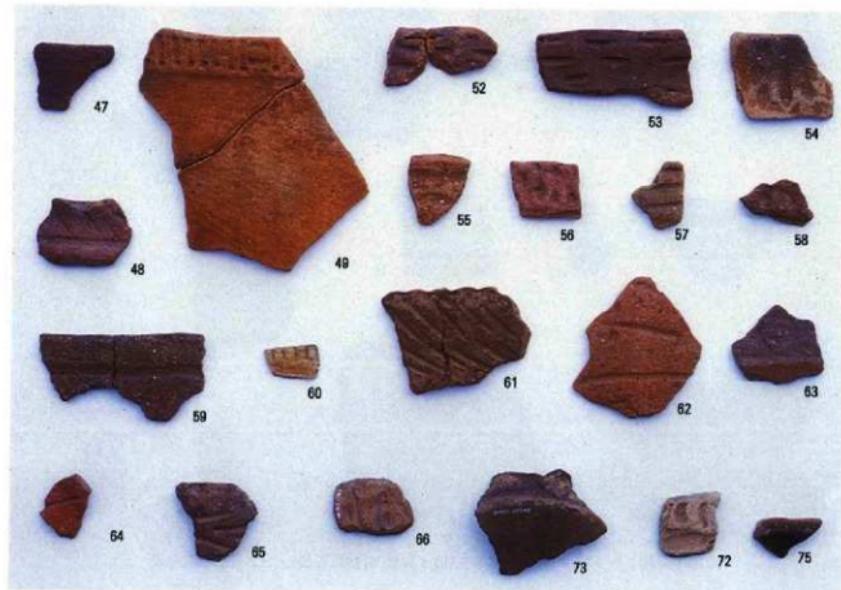
SX-004(1, 2)
SK-006(3)



S K-007(4~7) • S K-009(8~10) • S K-011(11~15) • S K-012(16~19)



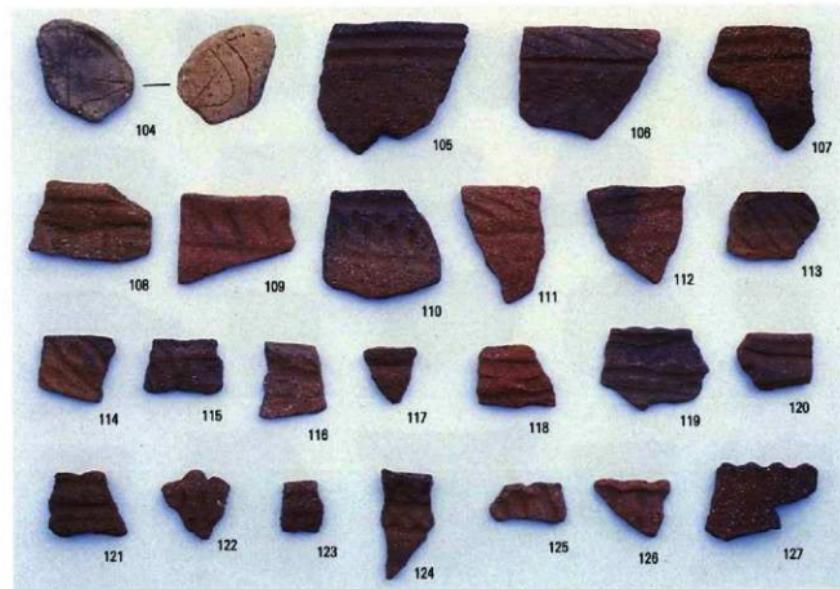
S K-015 (20) • S K-017(21) • S K-023(22) • S K-025(23) • S X-030(24~26) • S K-031(27) • S K-032(30~46)



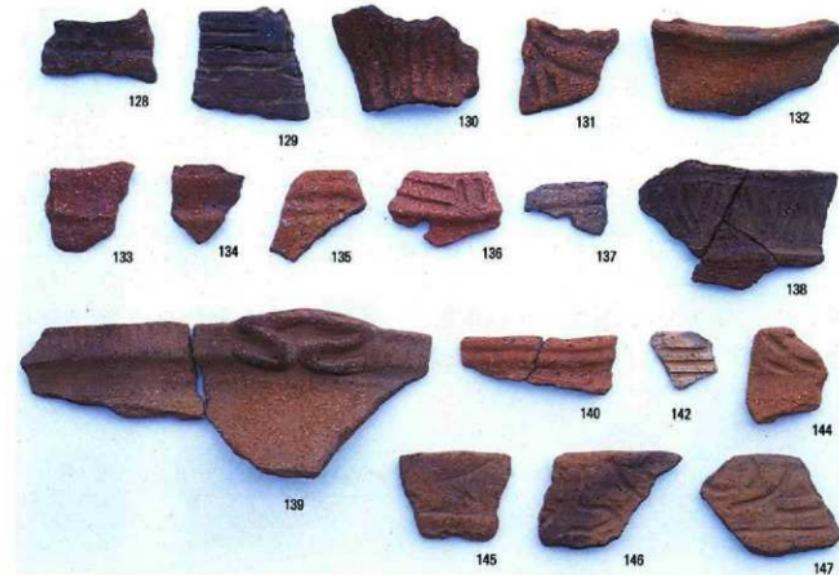
S K-033(47~48) • S K-034(49) • S H-035(52~58) • S K-040(59~63) • S D-044(64~66) • S K-049(73~75)



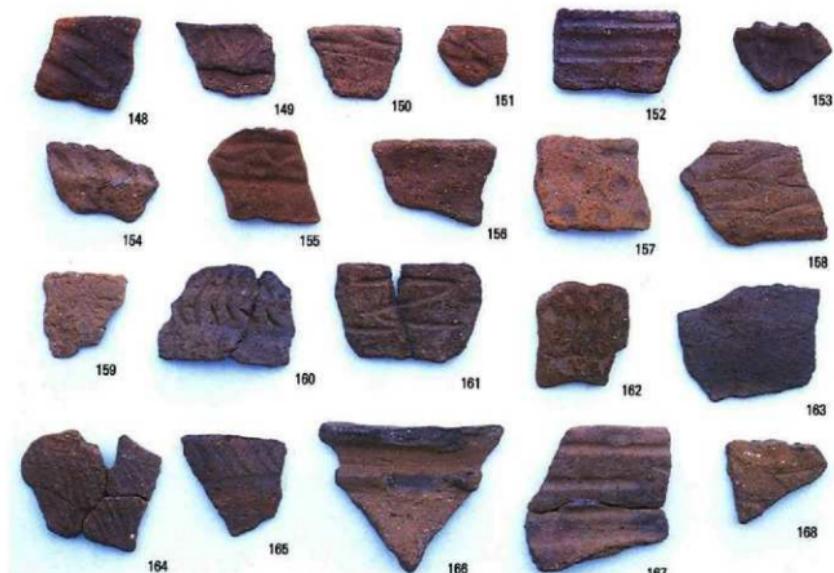
遺物包含層出土土器①(76~78・82~89・92~96・98~101)



遺物包含層出土土器②(104~127)



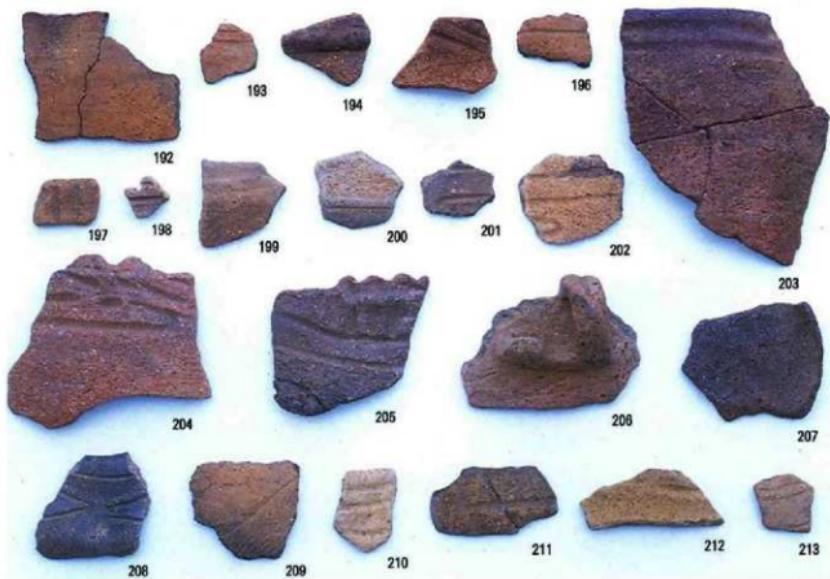
遺物包含層出土土器③(128~140・142・144~147)



遺物包含層出土土器④(148~168)



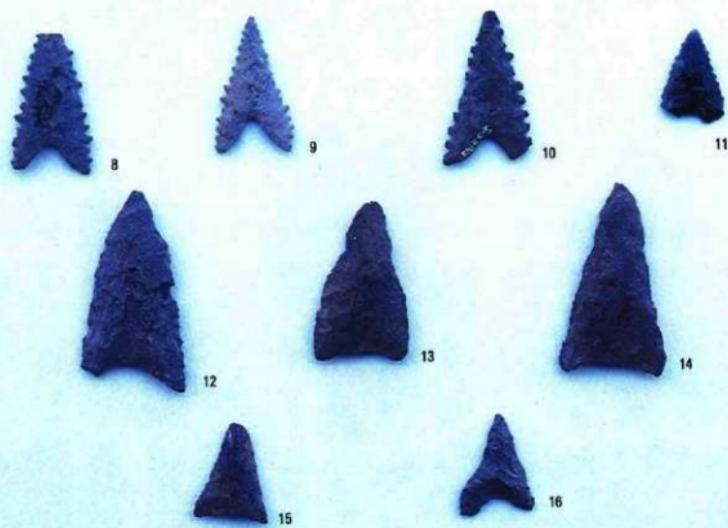
遺物包含層出土土器⑤(169~191)



遺物包含層出土土器⑥(192~213)



石器(1) 石斧(1~5)・叩き石(6, 7)



石器(2) 石鏃(8~16)



石器(3) 石鋸(17)・石錐(18)・石槍(19)



石器(4) 摘器類(20~22)

報告書抄録

ふりがな	ふないしいせきⅤ							
書名	船石遺跡Ⅴ							
副書名	平成元年度佐賀県農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	上峰町文化財報告書							
シリーズ番号	第12集							
編著者名	原田 大介							
編集機関	上峰町教育委員会							
所在地	〒849-01 佐賀県三養基郡上峰町大字坊所319-4 上峰町民センター Tel 0952-52-3833							
発行年月日	1995年3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
市町村	遺跡番号	41345	1002 2008 3016	33°20'28"	130°25'42"	1989.8.21 1989.10.25	1,100m ²	農業基盤 整備事業
船石	佐賀県三養基郡 上峰町大字斐 字二本谷							
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
船石	集落跡	縄文時代	竪穴式住居址 1軒 土壤 38基 埋め甕 2基 包含層	縄文式土器(中期~晚期) 石器類				

上峰町文化財調査報告書第12集

船石遺跡 V

平成7年3月24日印刷

平成7年3月31日発行

編
集
行

上峰町教育委員会

佐賀県三養基郡上峰町坊所319-4

印 刷

(株)昭和堂印刷 佐賀支店

佐賀県佐賀市神野西4-1-32



